第75回東北地区高等学校PTA連合会

秋田大会 報告書

令和8年 7月9日(木) -10日(金)

会場：あきた芸術劇場ミルハス・ANA クラウンプラザホテル秋田



つながる絆　踏みだそう　明日(あす)への一歩

～子どもたちの応援隊は郷土(ここ)にある～

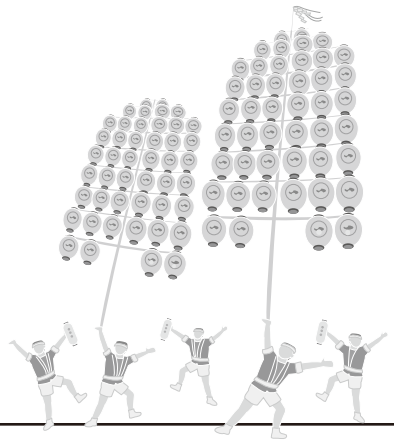




主催：東北地区高等学校 PTA 連合会
共催：一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会
後援：秋田県教育委員会
　　秋田市教育委員会
　　秋田県高等学校長協会
主管：秋田県高等学校 PTA 連合会

第75回 東北地区高等学校PTA連合会

秋田大会報告書



感謝

CONTENTS

01　目次

02　大会フォトギャラリー

03　秋田大会を終えて
　　大会実行委員長　金子宗元

04　開催要項

05　大会次第

06　開会行事
　　歓迎のことば
　　大会実行委員長　金子宗元
　　あいさつ
　　大会会長　菊地佐起子
　　（一社）全国高等学校PTA連合会事務局長　中川徹
　　来賓祝辞
　　秋田県教育委員会教育長　安田浩幸
　　秋田市副市長　猿田和三
　　受賞者代表謝辞
　　宮城県高等学校ＰTA連合会前会長　稲垣美樹

07　基調講演
　　シンガーソングライター　松本英子氏
　　アナウンサー　石垣政和氏

08　研究協議
　　発表内容
　　質疑応答
　　指導助言

09　閉会行事
　　次期開催県（青森県）あいさつ

10　編集後記

第75回 東北地区高等学校PTA連合会

秋田大会
フォトギャラリー







情報交換会　7月9日（木）　ANAクラウンプラザホテル秋田















● **司会**
フリーアナウンサー
武藤　綾子



● **開会のことば**
大会実行委員長
金子　宗元



● **あいさつ**
大会会長
菊地　佐起子



● **祝辞**
秋田県教育庁
教育次長　鈴木　雄輝



● **来賓紹介**
大会実行委員
佐藤　　徹













● **乾杯**
秋田県高等学校長協会
会長　庫山　　徹



● **地酒紹介**
大会実行委員
佐々木　淳一

● アトラクション　超神ネイガー











● 中締め

大会実行副委員長
齋藤　正樹

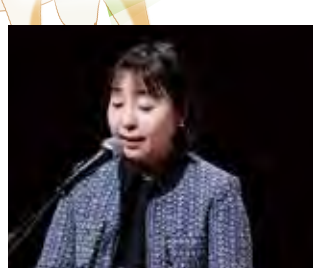








開会行事　7月10日（金）　あきた芸術劇場ミルハス



● **司会**
フリーアナウンサー
武藤　綾子





● **開会宣言**
大会実行副委員長
前田　周平





● **歓迎のことば**
大会実行委員長
金子　宗元



● **あいさつ**
大会会長
菊地　佐起子





● **あいさつ**
全国高Ｐ連事務局長
中川　　徹



● **祝辞**
秋田県教育委員会
教育長　安田　浩幸





● **祝辞**
秋田市　副市長
猿田　和三



● **来賓紹介**
大会実行副委員長
伊藤　瑞希





● **祝電披露**
大会実行副委員長
泉谷　　悟



● **役員紹介**
大会実行副委員長
木村　美穂



● **表彰状受賞者代表**
青山　　真







● **感謝状受賞者代表**
稲垣　美樹



● **受賞者代表謝辞**
稲垣　美樹



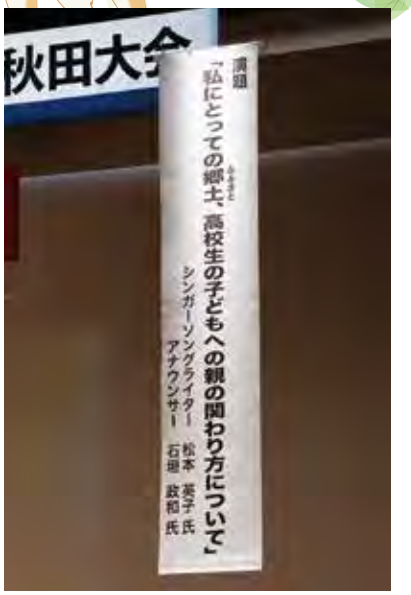
● **閉会のことば**
大会実行副委員長
照井　元



● **広報紙コンクール最優秀校**
岩手県立花北星雲高等学校



基調講演　私にとっての郷土（ふるさと）、高校生の子どもへの親の関わり方について













●シンガーソングライター
松本　英子　氏





●アナウンサー
石垣　政和　氏

















高校生発表

● 秋田県立男鹿海洋高等学校郷土芸能部　なまはげ太鼓の演奏

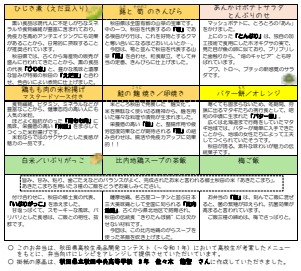




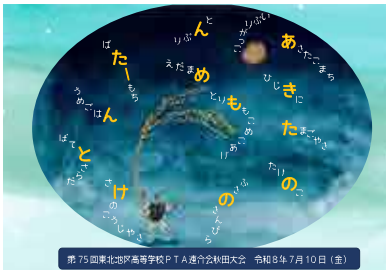





● 秋田県高校生商品開発コンテストにおいて高校生が考案したメニューによる昼食弁当



○ これらお弁当は、秋田県高校生商品開発コンテスト（令和７年）において高校生が考案したメニューをもとに、県当所において試作されたものを参考に調製されています。
○ 献立の原案は、秋田県立秋田中央高等学校　３年　佐々木　由梨　さんに作成していただきました。





● あきた総文 2026 合同合唱団　Harmony と「ふるさと」による合唱幻想曲の演奏








● あきた総文 2026 生徒実行委員会による大会ＰＲ

研究協議

「地域・家庭・学校つながる応援隊！」
～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる” ＰＴＡ活動とは～





















閉会行事





●次年度開催県あいさつ
青森県高等学校ＰＴＡ連合会
会長　濱田　大臣



















●閉会宣言
大会実行副委員長
大沢　知之











大会スナップ１






















大会スナップ２

















大会スナップ３
























秋田大会を終えて

第75回 東北地区高等学校PTA連合会
秋田大会実行委員長 金　子　宗　元

令和８年７月９日（木）、10日（金）の両日にわたり開催された第75回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会は、「つながる絆　踏みだそう　明日への一歩～子どもたちの応援隊は郷土にある～」というテーマのもと、東北６県より約1000名を超える多くの皆様にご参加を頂き、大盛況のうちに幕を閉じました。

ご参加下さいました皆様に心より御礼申し上げます。

大会初日の夜を彩った情報交換会は、雪国秋田の気候と豊かな自然に育まれた日本酒の盃を交わし、ご当地ヒーローによるアトラクションも交え、和気藹々とした場となりました。秋田と東北の地域文化や暮らしに根差し、日本海沿岸部に広く伝わる来訪神「ナモミハギ」の伝承をモチーフにした「超神ネイガー」の熱い思いにも触れて、地元高校生栽培のお米を酒米とした地酒なども賞味していただきながら、郷土の応援隊として子どもたちに向き合う様々な思いや、取組を共有、共感し、またつながる場となりました。

大会２日目は、秋田県立男鹿海洋高等学校郷土芸能部による、男鹿の伝統行事であるナマハゲの精神と和太鼓を組み合わせた「なまはげ太鼓」の演奏で幕を開けました。来場者の心を揺さぶり、活力を与える、ふるさとの文化とそれを受け継ぐ高校生の力を、改めて感じさせられました。

基調講演では、「私にとっての郷土、高校生の子どもへの親の関わり方について」と題し、シンガーソングライターの松本英子氏、アナウンサーの石垣政和氏にご講演いただ頂きました。松本氏には、ご自身の子育てのご経験や自らの高校時代をも交えながらのお話と“Squall”など二曲の歌唱披露により、会場は、時に笑いあり、また息をのみ、熱気に満ち溢れる場となりました。

昼食には、秋田県高校生商品開発コンテストにおいて高校生が考案したメニューをもとにレシピを作成したお弁当を提供させて頂き、大変好評でした。

また、あきた総文2026合同合唱団による「Harmony」、「＜ふるさと＞による合唱幻想曲」の歌声は、故郷への思いの詰まったもので、まさに本大会のテーマに相応しく、会場を魅了しました。

研究協議では、「地域･家庭･学校つながる応援隊！ ～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる”ＰＴＡ活動とは～」というテーマのもと、東北６県の代表校が発表して下さいました。少子化に伴う、生徒数やＰＴＡ会員世帯数の減少の影響から、ＰＴＡ活動のあり方を見直し、再編や持続可能なあり方を模索するといった取組が発表される一方で、子ども達の裏方、応援隊として、また、地域とのつながりを大切にする、という一つの方向性が見えた研究協議でありました。そのあり方の一つに、コミュニティースクール活動と共にあるＰＴＡ活動という図式も示されました。

少子化や、過疎化による地元とのつながりの希薄化、役員のなり手不足などに直面するＰＴＡ活動も、地域の人々と共に、故郷や文化の中で、子どもたちを見守り、応援していく形を模索することに活路を見出し、持続、発展させていくことが出来るのではないかという思いを強く懐きました。

皆様が、この秋田大会で共有した知見と熱意を、各県の活動に持ち帰り、未来を担う子どもたちのために、ＰＴＡ活動を力強く推進していくことを切に願います。

最後になりますが、大会の開催にご尽力下さいました関係者の皆様、秋田県高等学校ＰＴＡ会員の皆様に改めて深く感謝いたします。特に今大会は、直後に「あきた総文2026」を控え、実行委員をお勤め下さいました会員の皆様には、大変な制約のある中、献身的にご尽力下さいましたことに、衷心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

第 75 回　東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
秋田大会開催要項

１　期　日　令和８年7月9日(木)・10日(金)
２　会　場　あきた芸術劇場ミルハス・ＡＮＡクラウンプラザホテル秋田（情報交換会）
３　主　催　東北地区高等学校ＰＴＡ連合会
４　共　催　一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会
５　後　援　秋田県教育委員会・秋田市教育委員会・秋田県高等学校長協会
６　主　管　秋田県高等学校ＰＴＡ連合会

７　東北地区高Ｐ連大会開催目的

会員が相互に連携し、子どもたちの豊かな個性の伸長を図り、社会の進展に対して主体的に取り組むことができるたくましい高校生を育成するため、研修・研鑽を積み重ね、今後のＰＴＡ活動のさらなる充実発展に寄与する。

８　東北地区高Ｐ連大会開催方針

(1)　保護者と教職員の生涯学習の場として、高校教育に関する建設的な意見交換を行う。
(2)　高校生の健全育成に関する問題について討議し、今後のＰＴＡ活動を充実させる。
(3)　家庭・学校・地域社会がともに手をとり、高校教育の諸問題に取り組む。
(4)　ネット社会におけるＰＴＡの役割を認識し、モラルある情報社会の構築を目指す。

９　秋田大会テーマ、開催趣旨、研究協議テーマ

(1)　テーマ

「つながる絆　踏みだそう　明日（あす）への一歩　～子どもたちの応援隊は郷土（ここ）にある～」

(2)　開催趣旨

近年、全国的にみるとＰＴＡ活動は、人口減少や過疎化に伴う会員世帯数の減少、学校再編・統廃合、コロナ禍以降の地域コミュニティとのつながりの希薄化など、さまざまな問題に直面しています。これらにより、会費収入の減少、活動規模の縮小、さらにはＰＴＡ不要論までもが出始めています。また一方で、高校生でありながらも大人と同じ扱いとなる「１８歳成人」など、子どもたちをとりまく社会環境も急速に変化しています。

こうした子どもたちやＰＴＡが向き合うさまざまな問題においては、人と人との結びつきが困難を乗り越える力、そして勇気になります。お互いを思いやり、支え合う心のつながりを大切にすることによって、小さな一歩でも自分の歩幅で、子どもたちが未来へ明日へ進んで行けるよう、寄り添う私たちでありたいと願ってやみません。また不登校やいじめ、さまざまな心の悩み、障害を抱える子どもやその家族も「置き去りにしない」ことも大切だと思います。

子どもたちを育み、私たちが暮らす郷土（ふるさと）の自然や継承されてきた伝統、そして人とのつながりを胸に、子どもたちがいつでも帰ってくることができる、戻りたくなる場所が「郷土（ここ）」であって欲しいと思います。

私たち保護者・地域の人びと・学校とがつながり、多様な価値観を認め合いながら時代と社会の変化を前向きに捉え、子どもたちが明日への希望と大きな力(勇気)を持ち、安心して羽ばたいていける、その応援隊になろうではありませんか！

(3)　研究協議テーマ

地域・家庭・学校つながる応援隊！
～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる”ＰＴＡ活動とは～

10　基調講演　演　題　**「私にとっての郷土（ふるさと）、高校生の子どもへの親の関わり方について」**
講　師　シンガーソングライター　松　本　英　子　氏
アナウンサー　石　垣　政　和　氏

11　大会日程及び会場

月　日	時　　間	内　　容	会　　場
7月9日（木）	13：00 ～ 13：30	大会運営会議 （実行委員・専門部長・他関係者）	あきた芸術劇場 ミルハス 〒010-0875 秋田県秋田市 千秋明徳町2-52 TEL：018-838-5822
	13：30 ～ 16：00	ステージリハーサル	
	15：00 ～ 16：00	研究協議打合せ・リハーサル （発表者・助言者・司会者等）	
	17：00 ～ 17：30	情報交換会受付	ＡＮＡクラウン プラザホテル秋田 〒010-0001 秋田県秋田市 中通2-6-1 TEL：018-832-1111
	17：30 ～ 19：30	情報交換会 　アトラクション「超神ネイガー」	
7月10日（金）	9：30 ～ 10：20	オープニング・アトラクション 「なまはげ太鼓演奏」 　（男鹿海洋高校郷土芸能部） 開会行事 ・開会宣言　挨拶・祝辞・表彰 ・東北地区高Ｐ連役員紹介	あきた芸術劇場 ミルハス 〒010-0875 秋田県秋田市 千秋明徳町2-52 TEL：018-838-5822
	10：30 ～ 12：00	基調講演 演題「私にとっての郷土（ふるさと）、 高校生の子どもへの 親の関わり方について」 講師　松本　英子　氏 石垣　政和　氏	
	12：00 ～ 13：00	昼食	
	13：00 ～ 13：10	アトラクション「合唱」 （あきた総文2026合同合唱団）	
	13：10 ～ 13：15	あきた総文2026生徒実行委員会によるＰＲ	
	13：20 ～ 14：50	研究協議 テーマ：地域・家庭・学校 つながる応援隊！ ～子どもたちの健やかな成長を育む “つながる”ＰＴＡ活動とは～	
	14：50 ～ 15：00	閉会行事 ・次期開催県挨拶（青森県） ・閉会宣言	

第75回東北地区高Ｐ連
秋田大会次第

期　日：令和８年７月９日（木）～ 10日（金）
会　場：あきた芸術劇場ミルハス、ＡＮＡクラウンプラザホテル秋田

■７月９日（木）　　会場：ＡＮＡクラウンプラザホテル秋田
情報交換会　　17：30 ～ 19：30

１	開会のことば	大会実行委員長	金　子　宗　元
２	あいさつ	大会会長	菊　地　佐起子
３	祝　　辞	秋田県教育庁　教育次長	鈴　木　雄　輝
４	来賓紹介	大会実行委員	佐　藤　　徹
５	鏡 開 き		
６	乾　　杯	秋田県高等学校長協会会長	庫　山　　徹
	地酒紹介	大会実行委員	佐々木　淳　一
７	懇　　談		
	アトラクション	超神ネイガー	
８	中 締 め	大会実行副委員長	齋　藤　正　樹

■７月10日（金）　　会場：あきた芸術劇場ミルハス
１　　開会行事　　９：30 ～ 10：20

	司会	武　藤　綾　子
オープニング	なまはげ太鼓　演奏	
		男鹿海洋高等学校　郷土芸能部
(1) 歓迎のことば	大会実行委員長	金　子　宗　元
(2) あいさつ	大会会長	菊　地　佐起子
	一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会事務局長	中　川　　徹
(3) 来賓祝辞	秋田県教育委員会教育長	安　田　浩　幸
	秋田市副市長	猿　田　和　三
(4) 来賓紹介	大会実行副委員長	伊　藤　瑞　希
祝電披露	大会実行副委員長	泉　谷　　悟
(5) 表彰		
① 表彰状贈呈	受賞者代表	青　山　　真
② 感謝状贈呈	受賞者代表	稲　垣　美　樹
③ 令和７年度広報紙コンクール表彰	受賞者代表	岩手県立花北青雲高等学校
④ 受賞者代表謝辞	受賞者代表	稲　垣　美　樹
(6) 令和８年度東北地区高Ｐ連役員紹介		
(7) 閉会のことば	大会実行副委員長	照　井　　元

2　基調講演　10：30 ～ 12：00

講　師　シンガーソングライター　松　本　英　子　氏
アナウンサー　石　垣　政　和　氏

演　題　「私にとっての郷土（ふるさと）、
高校生の子どもへの親の関わり方について」

講師紹介　大会会長　菊　地　佐起子

花束贈呈　大会実行委員　草　皆　英　弥
野呂田　郁　子

3　昼食・休憩　12：00 ～ 13：00

4　高校生発表　13：00 ～ 13：10

合唱　あきた総文2026合同合唱団

5　あきた総文2026高校生実行委員会からのＰＲ　13：10 ～ 13：15

あきた総文2026高校生実行委員会

6　研究協議　13：20 ～ 14：50

テーマ

「地域・家庭・学校つながる応援隊！
～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる”ＰＴＡ活動とは～」

コーディネーター　秋田県生涯学習センター
シニアエキスパート(兼)社会教育主事　瀧　澤　徳　彦

(1) 研究発表　各　県　代　表
(2) 質疑応答
(3) 指導助言　秋田魁新報社　取締役
統合編集本部長　松　川　敦　志

7　閉会行事　14：50 ～ 15：00

(1) 次期開催県あいさつ　青森県高等学校ＰＴＡ連合会会長　濱　田　大　臣
(2) 閉会宣言　大会実行副委員長　大　沢　知　之



開会行事
歓迎のことば

第75回 東北地区高等学校PTA連合会
秋田大会実行委員長 **金　子　宗　元**

ようこそ「美の国」あきたへお越しくださいました。

世界自然遺産の「白神山地」、日本一の水深に神秘的なコバルトブルーの湖面が美しい「田沢湖」、四季折々に美しい出羽の富士「鳥海山」など、豊かな自然と美しい絶景、「秋田竿燈まつり」や「なまはげ」、「大曲の花火」など伝統文化の美、「きりたんぽ鍋」や日本大三うどんの一つ「稲庭うどん」などの美味、そして全国屈指の酒どころの美酒。まさに、「美」に彩られた「美の国」あきたにようこそお越しくださいました。秋田県高等学校ＰＴＡ連合会会員一同、心より歓迎申し上げます。

東北地区の各高等学校ＰＴＡ会員の皆様におかれましては、多大なご協力を賜り、秋田県におきまして第７５回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会を開催できますことを、深く感謝申し上げます。また、ご多用中の中ご臨席くださいましたご来賓の皆様に、大会実行委員を代表し、厚くお礼申し上げます。

東北地方の高等学校ＰＴＡは、少子化に伴う学校再編（統廃合）や、過疎化による地元とのつながりの希薄化、進路支援の難しさ、役員のなり手不足など、数々の課題を抱えています。こうした課題に向き合い、本大会のテーマや研究協議を企画させていただきました。

本大会から、皆様の地元のＰＴＡ活動や地域を盛り上げるための示唆やヒントを見つけ、持ち帰っていただき、本大会が東北地区の各高校ＰＴＡにとって実りある大会となりますよう、心より祈念申し上げます。

ただいまより第７５回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会を開催いたします。







あいさつ

第75回 東北地区高等学校PTA連合会
秋田大会会長 菊　地　佐起子

東北地区高等学校ＰＴＡ連合会の皆様、本日は第７５回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会にご参加いただき、心より感謝申し上げます。東北各地よりお越しいただきました皆様と、この貴重なひとときを共に過ごすことができ、大変光栄に思います。また、日頃より当会の活動にご支援、ご協力をいただいております秋田県教育委員会教育長　安田浩幸様をはじめ、たくさんのご来賓の皆様にご臨席を賜り本大会を開催できますこと、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

さて、今回の大会テーマは「つながる絆　踏みだそう　明日への一歩　～子どもたちの応援隊は郷土にある～」といたしました。準備委員会を立ち上げた最初のメンバーから、子どもたちへの思いをお一人お一人からキーワードを出していただき、子どもを思う保護者の温かい決意やメッセージを紡ぎました。子どもたちを取り巻く環境が目まぐるしく変化していく中でも、子どもたちの健やかな成長を願う気持ちは変わりません。学校・家庭・地域が手を取り合い、強固な「絆」で子どもたちを包み込むという気持ちを込めました。子どもたちが未来へ向かって明日への一歩を踏み出す時、そこには不安や戸惑いもあるはずです。だからこそ、私たちが「ここにいるよ」「いつでも味方だよ」と存在を示すことで、安心して挑戦できる環境づくりが大切だと思います。ここに集う皆様が子どもたちの応援隊となり、温かいまなざしと拍手で背中を押し続けること、それこそが子どもたちの生きる力と無限の可能性を育むと信じています。そして、自然豊かなこの東北の地に、子どもたちがいつでも帰ってこれることができる、戻りたくなる「郷土」、ここを守りながら、振り返れば笑顔で支える大人がいる、地域がある、そんな温かい応援隊として、皆さんと一緒に歩んでいきたいと思っております。

最後になりますが、本大会の開催に当たり、各関係団体の皆様から多大なるご支援とご協力を賜りました。重ねてお礼申し上げます。また、準備に当たり、金子宗元実行委員長をはじめとする秋田大会実行委員会の皆様、そして関わられた全ての皆様のご尽力により心から感謝を申し上げます。

結びに、各県並びに各単位ＰＴＡの今後のますますのご発展と、本日ご参集いただきました皆様のご健勝とご多幸を心より祈念いたしまして、私の、本当に声が枯れて申し訳ありません。聞きにくかったと思います。挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。





あいさつ

一般社団法人全国高等学校PTA連合会
事務局長　中　川　　徹
（一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会　会長 田名部智之代理）

本来であれば、共催者代表として田名部会長がこちらで挨拶をさせていただくということでございましたが、今年は海外出張ということで代理として私がまいりました。私は一昨年も会長の代理としてまいりまして、その時は田名部会長はちょっと諸事情でお邪魔することができませんでした。今日は私が改めて田名部から預かりました挨拶文を代読させていただきます。

ご参加の皆様におかれましては、日頃よりＰＴＡ活動に深いご理解と多大なるご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

本大会は、「つながる絆　踏みだそう　明日への一歩　～子どもたちの応援隊は郷土にある～」をテーマに開催されます。東北地区各県から多くの保護者と教職員、関係者が一堂に会し、それぞれの実践や思いを共有しながら互いの理解と連携を深めることは、大変意義深いことであります。この秋田の地での出会いと学びが人と人とのつながりをより強くし、新たな絆として広がっていくことを大いに期待しております。

今日、私たちを取り巻く教育環境は大きく変化しております。少子化の進行や地域社会の在り方の変化、情報化社会の急速な発展、多様化する価値観への対応など、課題は多岐にわたります。このような中にあって、ＰＴＡには、従来の枠にとらわれず、地域と共に子どもたちの育ちを支える、柔軟で開かれた、無理のない、持続可能な活動が求められております。本大会の趣旨である、多くの課題による会費収入の減少、活動規模の減少、ＰＴＡ不要論は、まさに今後のＰＴＡ活動の指針となるものです。ここで得られる学びや気づきを、それぞれの地域、学校に持ち帰り、さらなる活動の充実につなげていただければ幸いに存じます。

今こそ互いを認め合い、支え合い、信じ合う心を大切にしながら、子どもたちの未来のために力を結集していくことが重要であります。本大会がその契機となり、参加された皆様にとって実り多い一日となることを心より願っております。

申し遅れましたが、私も同じ東北地区、田名部会長のことでございますが、八戸工業大学第一高等学校の現役ＰＴＡ会長であり、地区並びに県連会長経験者でもあります。私が会長の時はコロナ禍であり、このような大会を開けない時期でしたので直接会う機会が制限されており、大変うらやましく思います。リアルの交流ができることに感謝しながら、よい化学反応を起こしていただきたく思います。

かないますならば、８月２０日に大分県で開催される第７５回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会大分大会にて皆様とお会いできることを楽しみにしております。

結びに、本大会の開催に当たり多大なるご尽力を賜りました秋田県高等学校ＰＴＡ連合会をはじめ、関係各位に深く敬意と感謝を申し上げますとともに、東北地区高等学校ＰＴＡ連合会並びに各校ＰＴＡのさらなる発展と生徒の健やかな成長を祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。



来賓祝辞

秋田県教育委員会
教育長 安　田　浩　幸

はじめに、「第75回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会」がこのように盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。また、東北各県よりお越しいただいた皆様を心から歓迎いたします。そして皆様には、日頃から各学校におけるＰＴＡ活動にご尽力いただいておりますことに、改めて深く感謝申し上げます。

本大会は、６年前の秋田大会がのコロナ禍により一堂に会することが叶わなかったため、秋田県での開催は12年ぶりとなります。12年前の平成26年大会は大館市で開催されました。当時、私は大館国際情報学院中・高等学校の校長を務めており、そのときのＰＴＡ会長が実行委員長を担われていた縁から、私も微力ながら運営に携わらせていただきました。そのような私的な歩みもあり、12年の歳月を経て再び秋田県において、このように多くの皆様を迎えて東北大会が開催できることに、大変感慨深いものを抱いております。

さて、ここ数年の教育をめぐる動向には非常に目まぐるしいものがあります。と同時に、様々な課題も浮き彫りになってまいりました。教員不足という全国的な問題をはじめ、東北地方においては人口減少や少子化が深刻であり、学校の小規模化や統廃合などが進められている状況にあります。また、地震や大雨など頻発する自然災害への備えや、近年のクマ対策など、安全確保の対応に追われている現状は各県共通の苦慮と言えます。一方で国においては、給食の無償化や高校無償化といった大きな変革が今年度から始まっており、あわせて、将来の理系人材や産業人材の育成に向けた「ＤＸハイスクール」や「ネクストハイスクール」といった施策も打ち出されています。

このように課題が多様化・複雑化する現代において、子どもたちの安心・安全を守り、学力のみならず豊かな人間性を育み伸ばしていく教育を実践することは、もはや学校の力だけでは困難な時代を迎えていると言わざるを得ません。地域の力、そして何よりも保護者の皆様のご理解とご協力が不可欠であり、学校におけるＰＴＡの果たす役割は、以前にも増して重要性を帯びていると実感しております。ぜひ、今大会のテーマにあるように「子どもたちの応援隊」、そして「学校の応援隊」として、引き続き今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、本県で開催される行事について一言申し添えます。お手元の配付資料にもチラシが同封されていることと存じますが、７月26日より、本県を舞台に「第50回全国高等学校総合文化祭」が開催されます。本日の午後には、生徒実行委員とマスコットキャラクターの「あきたぽ」が会場に駆けつけ、改めてＰＲを行う予定ではございますが、私からもご紹介させていただきます。「あきた総文２０２６」は、7月26日(日)に、まさにこの会場である「あきた芸術劇場ミルハス」の大ホールにて総合開会式が執り行われます。その後には、皆様が今朝通られたお堀沿いの道路「広小路」においてパレードが催されます。 翌27日から８月1日までの期間は、県内８つの市を会場に、全22部門の展示や発表が展開されます。 全国の高校生による芸術文化活動の祭典であり、「文化部のインターハイ」とも称されるこの大会には、期間中に延べ約２万人の高校生が参加する見込みです。東北各県からも数多くの優れた作品の展示や発表がございますので、ぜひ皆様にも足をお運びいただき、ご覧いただければ幸いです。

結びに、東北地区高等学校ＰＴＡ連合会のますますのご発展と、各県の県高Ｐ連、ならびに各学校におけるＰＴＡ活動の充実、さらには本日ご参会の皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



来賓祝辞

秋田市副市長　**猿　田　和　三**

（秋田市長　沼谷 純代理）

皆さんおはようございます。秋田市副市長の猿田でございます。沼谷秋田市長が残念ながら現在外国へ出張中でございまして、代わりに私が市長から預かってまいりましたメッセージを代読させていただきます。

本日、東北各県から熱意あふれるＰＴＡ会員の皆様をお迎えし、第７５回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会が、ここ伝統と四季が引き継ぐ秋田市のランドマーク、あきた芸術劇場ミルハスにおいて盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。東北各県から秋田の地へお越しいただきました皆様を、市民を代表して心から歓迎いたします。また、日頃より皆様には、次代を担う高校生たちの健やかな成長と高等学校教育の振興のために多大なるご尽力を賜り、深く敬意を表します。

さて、私たちが直面している社会は、デジタル化やグローバル化が急速に進み、変化の激しい、正解のない時代と言われております。しかし、そのような時代だからこそ、人と人とのつながりの価値が一層高まっていると感じております。子どもたちの未来を支えるのは、家庭、学校、そして地域が一体となった強固な絆です。その架け橋を担うＰＴＡの皆様が共に学び、語り合う姿そのものが、子どもたちにとって何よりの希望であり、生きた教育であると確信しております。

秋田市では、「人と文化をはぐくむ誇れるまち」を目指し、子どもたちが地域の豊かな歴史や文化を誇りに思い、自ら考え、果敢に挑戦できる環境づくりに全力を注いでおります。ここ秋田市で開催される本大会が、各県各校のＰＴＡ活動のさらなる発展の契機となりますとともに、皆様の絆がより一層深まり、子どもたちの未来を照らす新たな知見が生まれる場となりますことを心よりご期待申し上げます。また、今月7月26日から本県で開催される第５０回全国高等学校総合文化祭に、是非とも皆様には再びこの秋田市へお越しいただくことを心からお願いを申し上げます。

結びに、本大会のご盛会と、東北地区高等学校ＰＴＡ連合会の輝かしいご発展、そして本日ご参会の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、歓迎のご挨拶といたします。

本日は誠におめでとうございます。

令和８年7月10日

秋田市長　沼谷純代読

秋田市副市長　猿田和三。

本日は誠におめでとうございます。





受賞者代表謝辞

宮城県高等学校PTA連合会前会長
（東北地区高等学校PTA連合会前会長）
稲　垣　美　樹

ただいまは立派な感謝状を賜り、受賞者を代表して心より御礼申し上げます。

このたびの感謝状は、決して私一人にいただいたものではございません。共にＰＴＡ活動を取り組んできた役員の皆様、会員の皆様、学校の先生方、県連事務局の先生方、そして地域の皆様のお支えがあっていただくことができたものでございます。この場をお借りし、これまでのご支援、ご協力をいただきました全ての皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

昨年度は宮城県で東北大会を開催し、東北各地から多くの皆様にお越しいただきました。皆様からいただいた温かい励ましとご協力のおかげで、大会を無事に終えることができました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

そして今年は、この秋田の地で私たちを温かく迎えてくださり、準備・運営にご尽力いただいた秋田県高等学校ＰＴＡ連合会の皆様に心より深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

昨年度、全国高等学校ＰＴＡ連合会で各地区の会長の皆さんと語り合う中で、「ＰＴＡ役員という肩書きに終わりがあっても、ＰＴＡで得た経験や御縁はその後の人生にもずっと続いていく」という言葉がありました。今、活動を振り返ると、その意味を改めて実感しております。ＰＴＡ活動を通していただいた多くの御縁や学びは、私にとって何物にも代えがたい財産です。本日いただきました感謝状を励みに、その御縁を大切にしながら、これからも子どもたちの健やかな成長を願い、微力ながら学校や地域とのつながりを育んでまいりたいと思います。

結びに、本大会のご成功と東北地区高等学校ＰＴＡ連合会のさらなるご発展、ご臨席の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げまして、受賞者代表の謝辞といたします。

本日は誠にありがとうございました。





基調講演

演　題

「私にとっての郷土（ふるさと）、高校生の子どもへの親の関わり方について」



松　本　英　子氏

シンガーソングライター



石　垣　政　和氏

アナウンサー

司会：

本日は基調講演といたしまして、シンガーソングライターの松本英子さん、そして皆さんご存じ、たくさんの方がご存じと思いますが、秋田のエンターテイメント界を牽引してきましたローカルタレントでアナウンサーの石垣政和さんをお招きいたしまして講演を行ってまいります。

なお、講演中は写真撮影、そして音声の録音はご遠慮いただきますように、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは始めてまいります。

初めに、講師お二方のご紹介を大会会長　菊地佐起子が行います。

皆様は、お手元の大会要項１３ページをご覧ください。菊地会長お願いいたします。

秋田大会大会会長　菊地佐起子：

それでは、講師の紹介をさせていただきます。

シンガーソングライターの松本英子さんは、秋田市のご出身で、1990 年「涙のチカラ」でデビュー、福山雅治氏のプロデュースによる「Ｓｑｕａｌｌ」は、月９ドラマの挿入歌として４０万枚のヒットを記録いたしました。秋田わか杉国体のテーマソング「ｍａｋｅ　ＩＴ　ｒｅａｌ」の作曲・歌唱を担当、その透明感はあふれる歌声でファンを魅了しております。その後、子育てと仕事を両立しながら幅広い分野で音楽活動を継続されており、Ｊ２サッカーチーム「ブラウブリッツ秋田」１５周年記念ソング「ＢＬＵＥ　ＦＬＡＭＥ」の制作や、2024 年には、このあきた芸術劇場ミルハスにおいてデビュー 25 周年記念コンサートを開催するなど、ご活躍をされております。

アナウンサーの石垣政和さんは、秋田県雄勝郡羽後町のご出身。斬新な企画と明るいキャラクターで、長年、地元秋田の番組の現場制作とパーソナリティに携わってこられています。現在も「柳葉敏郎のギバちゃんとゴルフへゴー！」や２７年目を迎えたＦＭ秋田「フォーエバーヤング」など、多くの番組でご活躍されております。

本日は、今年春、高校を卒業されましたお子様の母親でもあります松本さんの、ふるさとへの思

いや高校生の親としての経験などを、石垣さんとのトークショーの形でお話しいただけることを楽しみにしております。

では、どうぞよろしくお願いいたします。

石垣：

どうも皆さんこんにちは。（拍手）ようこそ秋田にお越しくださいました。今、菊地会長の方から懇切丁寧にご紹介をいただきましたけれど、何しゃべってるかさっぱり分からない。声がガラガラで、昨日すごい元気だったんですよ。夜ちょっと張り切りすぎちゃって、あんななっちゃった。本人が一番「あー」って思ってると思うので、心穏やかに見守ってあげてください。

さあこれからですね、松本英子さんをお迎えするんですけれども、英子さん好きな物は３つございまして、まず１つ目は、先ほどもご紹介ありました息子さん。大好きです。まあ旦那さんは置いときますけれども、息子さんが大好き。そしてですね２つ目、拍手です。アーティストですからね、盛大な拍手をって言ったら、ぶわーっと万雷の拍手で是非迎えてほしい。そしてアーティストですから、もう一つ好きなのがフラッシュ。パシャパシャパシャパシャ。パシャパシャパシャパシャ。でもさっき何か禁止されてましたよね。かわいそうに。撮っていいですよ。最初の５分間ぐらいだけ。僕がわあーって迎えたら、パーっと。ただし、最近結婚式の司会とかしてるとですね、結婚式で拍手がないんですよ。普通だったら新郎新婦のご登場ですとかって、わあーって昔は拍手があったんですけど、今もうみんなスマホ構えますから。もう全然拍手がない。新郎新婦が気の毒でしょうがない。ですから、迎えました。松本英子さんです。うわーーっと、その後パシャパシャパシャパシャ。いいですね。それだけお約束を守っていただきたいと思います。

それでは、ご紹介いたしましょう。松本英子さんです。盛大な拍手を。（拍手）

松本：こんにちは。おはようございまーす。

石垣：すばらしい拍手でしょう。

松本：ありがとうございます。ああうれしい。ああうれしい。

石垣：すごーい。

松本：イエーイ。

石垣：イエーイ。全然駄目だわ。

松本：やっぱり時差がありますね、ホールはね。

石垣：そうですよね。

松本：ちょっと時差が。

石垣：そうだよね、時差がありましたけど。

松本：はい。

石垣：何持ってきたんですか。

松本：何かね会長が喉がらがらだったから、私の私物の飴を。飴なめてください、会長。

石垣：会長ちょっと。

松本：ちょっと溶けて固まってるんですけど、秋田がね、秋田のあれですよね、龍角散はね。

石垣：そう、龍角散、そう。六郷町。あ、美郷町。

松本：本当に本当に効くと思うんで。効くって言っちゃ駄目なのかな。本当に食べてください。

石垣：頑張ってくださいね。

松本：後で。

石垣：後でこれにサインくれって。

松本：これにサイン要らなくないですか。
石垣：ねえ、本当にね。
松本：はい。
石垣：さあ英子さん。
松本：はい。
石垣：地元秋田に帰ってきていただいて。
松本：はい。
石垣：結構帰ってくるんですか。
松本：割と頻繁に帰ってきていますね。２年ぐらい、二、三年ぐらい前から結構帰ってくるようになりました。
石垣：あら、それは何か理由とかあるんですか。
松本：あのまあ、それこそ子育てが少し、息子が高校に入った段階で少しやっぱり楽になってきたっていうのと、両親もすごく心配で、私が一人っ子なもので、ちょっとね地元にも帰りたいなっていう気持ちが少しずつ増えてきて、で、ちょっとずつ、月の３分の１ぐらい帰ってくる時もあります。
石垣：あ、結構じゃあ帰ってきてるんですね。
松本：そうですね。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：じゃあもう秋田っこですもんね。
松本：秋田っこでございます。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：秋田のどこで生まれたんですか。
松本：秋田のですね秋田市でございます。
石垣：秋田市ね。
松本：秋田市でございます。今、病院ってどこだったっけなあと思って。
石垣：うん、秋田市で生まれて。
松本：自分は息子を里帰り出産で中通病院で産んだんですよ。
石垣：ああ、はいはいはい。
松本：なんですけど、自分が生まれた病院がどこだったっけなと、ちょっと忘れちゃいました。
石垣：忘れちゃいました。
松本：はい。
石垣：で、小学校は。
松本：小学校が八橋小学校。
石垣：八橋行って。
松本：泉中学校。
石垣：はい。
松本：で、北高。
石垣：北高。
松本：はい。
石垣：高校時代ソフトボール部。





松本：はい。中高と。
石垣：あ、中高ですか。
松本：はい、６年間ソフトボールをやってました。
石垣：ねえ。全国レベルだって聞きました。
松本：全国ベスト８まで行きまして。
石垣：ねえ。
松本：そうなんです。
石垣：ソフトボール何やってたんですか。
松本：ピッチャーをやってました。
石垣：あ、ピッチャーで。
松本：そうです。
石垣：上野さんみたいに。
松本：ウィンドミル。そう、パーンって。そうなんです。
石垣：そのピッチャー、ピッチャーやってたっていうことは、まあ身長も当然高いですし。
松本：はい。
石垣：こう言い方あれですけど、がたいも大きかったんですか。
松本：あ、そうですね。まあ腕が今の倍ぐらいはあったかなというぐらいで、体格ももうちょっとおっきかったような気はするんですけど。
石垣：うん、そんなソフトボール少女が。
松本：はい。
石垣：なぜまた歌手に。
松本：ですよね。
石垣：ねえ。
松本：そもそも両親が音楽が大好きで、父がベース、母がボーカルとサックスをやっていてたんですね、ちっちゃい時に。その影響で、もう幼い頃から歌も大好きで、で、いろいろステージに上がらせてもらったりっていうのを繰り返してるうちに、多分自然と音楽の道っていうのは思い描いていて、で、たまたま中学３年生の時に文化祭があったんですけど、で、その文化祭で、こういう仕様になるじゃないですか。
石垣：はい、こうなりますね。
松本：もう暗幕が、体育館にこう暗幕があって、で、こうスポットライトとか、そういうのを学生がね準備してやるっていうその実行委員会をやってたんですけど、で、その時に、たまたまその準備の時にこうみんな飽きちゃって、体育館に行ってみようって言って、で、その準備中の体育館で、まあ遊びですよね、本当にマイクもなく生声で、ピアノが上手な子が一人いたので、その子が弾いてくれて、アラジンの「ホール・ニュー・ワールド」という曲を本当に遊びで、実行委員の子がまあ１０人ぐらいですかね、こうお客さんとしていてくれて、で、その中で私が歌ったら、一人の子が泣いてくれたんですよ。で、きっと何かあったのかもしれないんですけど、で、何か本当に歌に感動して涙が出てきたって言ってくれて、で、その瞬間に、あ、プロにもしかしたら近づけるかもしれないと思って、なので、その中学の時の、はい、そのたったその少しの遊びの時間が今につながってるって感じですね。
石垣：習ってたんですか、歌は。
松本：歌は全く習ってなかったんですね。ただ、やっぱりボーカリストのチャンスもつかみたいって

いうので、高校３年生の時にヤマハのボーカルスクールに通いまして、で、そこで歌手になるためのオーディションのチャンスをいただいて、で、そのオーディションに合格してデビューという形になりました。

石垣：へぇ。じゃあトントントンって感じで行っちゃったわけですか。

松本：トントンですよね。

石垣：ねえ。

松本：今考えると。まあその時は、まだその中学校の時に、もう高校はそれこそ行かずに上京したかったんですよ。

石垣：はい。

松本：で、東京に行って専門学校通いながらボーカリストになるって言ったんですが、まあ当然先生も両親も止めまして、いやいやいやちょっと待てと、一旦高校卒業しようっていうことで高校まで秋田にいたんですけど、ただ何かその３年間がすごく大事だったなという気がしていて。

石垣：当時の北高、北高でした。

松本：北高、はい。

石垣：北高だと女子高。

松本：女子高でしたね。

石垣：そうですよね。

松本：はい。

石垣：その３年間やっぱり大切だった。

松本：そうですね、今思うと、何かやっぱりその時にしかできない体験っていうの、まあ部活動、ソフトボールもそうですし、その女子高ならではの楽しい学校生活っていうのもやっぱり思い出深いものでしたし、そのオーディションもいろんなのを実は受けてたんですけれど、ただその勉強と、こうソフトボールっていう中ではバランスがやっぱり難しかったので、まあ書類審査だけみたいなことだったんですけど、でも何かその３年があったから、こうバネになったというか、絶対歌手になるんだっていう決意がその３年間で固まったかなというような気がします。

石垣：なるほど。その３年間、高校の３年間、当然自身が高校生。

松本：はい。

石垣：お父さん、お母さん、ＰＴＡ活動どうでしたか。お父さん、お母さん。

松本:あの、ＰＴＡは、多分母は小学校の時から割とＰＴＡはずっとやってるタイプだったんですが、高校の時がどうだったかの記憶はなくて、ただその部活動の送り迎えとかは、もうエブリデー。本当に、遠征とかもそうですけれど、遠くまでやっぱりね送ってくれたりとか。

石垣：じゃあ結構自分には関わってくれた。

松本：あ、かなり、かなり関わってくれてたと思います。

石垣：ねえ。

松本：はい。

石垣：あ、皆さん写真撮っていいですよ。

松本：今。

石垣：こっから５分間ぐらいはいいですよ。

松本：５分。

石垣：もし、あのね、帰りにお土産でほら、秋田に行ってきたのよ、松本英子さん、ちょっと隣に要らない男がいるけど、ちょっと撮ってきたわよなんて言いながら、写真撮っても大丈夫。

松本：いやいやいや。
石垣：すぐ構えてね、早いっすよね。
松本：あ、ありがとうございます。
石垣：そんな話で。
松本：ありがとうございます。
石垣：大丈夫ですから、撮って大丈夫ですからね。さあ、そして高校卒業してデビューをして、あっという間に売れちゃったじゃないですか、「Ｓｑｕａｌｌ」で。
松本:いやあ、ね、ちょうど大学２年生の時だったんですね。まだ、レコーディングした時は１９歳で、デビューしたのは、まあ「Ｓｑｕａｌｌ」のリリースは２０の時だったんですけど、早かったですね。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：福山さんから声かかったんですか。
松本：あれはオーディションだったんですが、最初は「パーフェクトラブ！」という月９のドラマ、ご存じの方いらっしゃいますかね。福山さんの。
石垣：ああいる、いらっしゃいますよ、何人か。
松本：知ってますか。
石垣：ああ、いるいる。結構いらっしゃいますよ。
松本：あ、うれしいです。ちょうど夏のね、この今のクールのドラマだったんですけれど、その挿入歌を福山雅治さんがサウンドトラックをプロデュースするということは決まっていて、で、ただその中で参加するアーティストは、まあご自身で歌ってももちろん多分オッケーだったと思うんですけど、新人のアーティストにチャンスをくださって、で、たまたま同じレコードレーベルだったというのもあって、そのオーディションに参加させていただいて、で、はい、オーディションを受けました。
石垣：それで決まったわけでしょう。
松本：はい。
石垣：もうトントントン拍子じゃないですか。本当すごいじゃないですか。
松本：ねえ。そう早い方ですね。
石垣：ねえ。
松本：２０で。
石垣：でもヒット曲あるっていうのはやっぱおっきいですよね。
松本：ヒット曲はもう何か当時は、あまりにもどこ行っても「Ｓｑｕａｌｌ」、「Ｓｑｕａｌｌ」、「Ｓｑｕａｌｌ」で、もうそろそろ「Ｓｑｕａｌｌ」はいいんじゃないでしょうかっていう若い時期はありましたけど、でもやっぱり今年で２７年なんですけど、ここまで続けられたのは本当にあの楽曲があったからだなと心から思いますね。
石垣：そして結婚して。
松本：はい。
石垣：出産。
松本：はい。
石垣：２００９年、８年でしたか。
松本：２００８年。
石垣：８年。

松本：の３月、早生まれなんですけど息子は

石垣：はい、はい。

松本：２００６年に結婚で、２００８年に出産しました。

石垣：ねえ。

松本：はい。

石垣：その子も今、大学１年。

松本：１年生。

石垣：ねえ。

松本：はい。

石垣：お名前は何ておっしゃるんですか。

松本：名前はですね、さくたっていうんですけど、お花が咲くに太で咲太といいます。

石垣：咲太君。

松本：はい。

石垣：何かその妊娠して出産をする頃って、ものすごい実は忙しくって。

松本：そうですね。

石垣：ねえ、レギュラー番組も４本でしたっけ。

松本：はい。ラジオ番組をたくさんやってたりとか、あとはまあ楽曲制作だったり、ライブとかもやっていたので、バタバタはしてましたね。

石垣：ねえ。

松本：はい。

石垣：それは、でもちょうど歌手としては脂が乗り切ってきた時に出産っていうのはどうだったんですか。

松本：何かこう自分の中では、こう、何て言うんですかね、思い描いたそのシンガーっていうものに何か到達できてない危うさみたいなのがあって、まあ若さというのもあるんですけど、自分はどういう音楽家になったらいいんだろうっていうのがもう本当にこう精神的になかなかこう定まらなくて、私はきっと子どもを産んで育てたら、もしかしたら一人前になれるかもしれないっていう。

石垣：なるほどね。

松本：まあ若干ちょっと浅はかなんですけど、ただ、何となくそんな気がしていて、早く子どもを産みたかったっていう気持ちがあって、なので、何か歌手、歌手生活もきっと子育てをしたことがプラスになるって思ってたので、あんまり何かその、そこをストップされるとかっていう思いは全然なかったんですよね。なので、ある意味、いい充電期間でもあり、本当に子育てが始まってから心も安定して、すごくいい音楽活動ができている気がします。はい。

石垣：でもお子さんは現場に連れてったりもしたって聞きましたけども。

松本：そうですね。

石垣：ねえ。

松本：もうラジオ番組とか生放送だったりするので、本当にその現場の近くに主人の親御さんに来てもらって、親に来てもらって、で、ピックアップしてもらったりとか、で、数時間預けて、で、本当に途中授乳に帰ったりとか、何かそういうのをしながら、はい、ですし、歌の現場も、本当にもうその歌の会場の近くのおうちに住んでる方のところに預けて、まだ２か月ぐらいの子を預けて、お願いしますって言って歌いに行って、１時間ぐらいして帰るみたいな、はい、感じでした。

石垣：じゃあみんなの協力があってと。

松本：そうですね。

石垣：ねえ。

松本：本当に助かりました。

石垣：その咲太君も順調に育ちましたか。

松本：順調だと思います。

石垣：ねえ。

松本：はい。

石垣：男の子ってどうなんですか、お母さん的にはお付き合い方は。

松本：いやあ、もう言葉をあまり選ばずに言うなら、もう本当にお馬鹿ですね。

石垣：男の子。

松本：もうかわいい。その何ていうか、素直で。その、何かやっぱり、女の子を私は育てたことがないので分からないんですが、でも自分が育ってきた経験上、ちょっと大変だと思うんですよ、やっぱり説明をしたりとか理解してもらうまで。でも男の子は、本当、駄目って言ったら、ふーんみたいなこう、すぐふぇーんみたいな感じで、まあはっきりと分かりやすく、怒ったら、まあごめんなさいって言うみたいな、何かそういう意味では、うん、こうかわいくて育てやすいっていうか、うん、だったかなと思います。

石垣：受験はどうだったんですか。

松本：受験ねえ。

石垣：受験。

松本：受験は、まあ今も東京に住んでるんですけど、一番最初に受験をトライしたのが小学校受験ですね。まあ皆さん幼稚園受験もあったりするんですが、小学校受験は本当に記念受験みたいな感じで１校だけやってみたんですけれど、でも小学校受験ってもう本当に親御さんが面接を受けるみたいな感じなので、何か本当は練習しなきゃいけないんでしょうけど、どこの塾にも行かず、何の知識もなくゼロベースで行っちゃって。

石垣：あ、親のそういう塾ってあるんですか。

松本：あ、もう親も一緒に。

石垣：ああ、ああ、はいはいはいはい。

松本:こういうことを聞かれるんで、こうやって答えてくださいみたいな、何かあるらしいんですよ。

石垣：うんうん、はい。

松本：私は全然そういうのも知識がなくて、まあ記念受験だしということで行ったんですけど、でもまあ案の定落ちまして、見事に落ちまして、中学受験、じゃあ周りもうほとんどみんな、まあ半分ぐらいは中学校。

石垣：中学受験ですか。

松本：はい。区立の小学校から私立の中学校に、じゃあトライしてみようかと思って塾に通ったんですけど、なかなかこうそれは、うーん、途中から、小学校５年生ぐらいからあんまりうまくいかなくて、本人もこう、何ていうか、自分の中でジレンマがあって、悩んで、最終的に登塾拒否みたいな感じになってしまって、あんまりそういう、まあ学校も大好きだし、何か基本的にそういうことはなかったんですけど、ただやっぱり自分の中でうまく折り合いがつかないところがあって、本人はやめるって言ったんで、じゃあいいよ、やめよう、もう全然もういい、いいって言って、もう中学受験そのものを、もう５年生の段階でやめようっていうことで、普通に都立の、はい、中学校。

石垣：その決断はご夫婦で決めて。

松本：そうですね。あの、主人は私立の中高一貫の出身だったんで、その良さも、あとは大変さも、受験の大変さもよく知ってるので、その辺はやっぱりいろいろ聞いて、、そんなに無理することはないと。じゃあ次に、次頑張ろうということで。なので、中学受験もやめました。やっと高校受験。

石垣：受験。

松本:というので、もうね、中学３年間はもうやっぱり本人自立してきますから、もう自分のペースで、時々ちょっと頑張れって言うぐらいで、割と自分で頑張るようになって、高校受験は無事第一志望に合格して、高校から大学までの附属の学校に進んだんですが、よし、もうこれで大学まで、いやもうこのままだなと。

石垣：ストレートだと。

松本：ストレートだ、よし、いやもう受験ないなって思ったら、突然、高校１年生の終わりですね、高校２年生になる前の春休みに部活をやめてきたんですよ。

石垣：はい。何の部活だったんですか。

松本：バドミントン部に。

石垣：バドミントン。

松本：はい、入っていたんですけど、どうしたって言って、受験するって始まったんです。何のための附属だったんでしょうみたいな。えーっていう。

石垣：何だったんでしょうね。

松本：何だったんでしょう。

石垣：ねえ。

松本：ねえ。

石垣：何があったんでしょう。

松本：本人の中で何かやっぱりその、早いですよね、高校って。高校入ってなと思ったら、もう２年生ではね、文系なのか理系なのか。

石垣：確かにそうだ。

松本：決めなきゃいけなかったりするじゃないですか。

石垣：うん。

松本：何か、え、もうこないだ入ったばっかりなのに、親としては。次もう大学決めなきゃいけないんだみたいな。もちろん大学じゃなくても、次の自分が向かう先っていうのをある程度クラス分けの段階でね決めなきゃいけないのが、自分の時もそういえばそうだったなっていろいろ思い出しながら、本人の中では何となくもう決意はできてて、このまま私立の中でやっていったら勉強しなくなっちゃうから部活やめてきたって言って。

石垣：へぇ。

松本：ほーみたいな。でもそこまでの気持ちがあるなら、じゃあ応援するっていうことで、はい。

石垣：結構じゃあ自分でやるって決めたから、結構頑張りもあったわけですね、本人に。

松本：そうですね。

石垣：ねえ。

松本：割と頑固な、はい。

石垣：誰に似たんでしょう。

松本：誰でしょうね。

石垣：ねえ。ＰＴＡ活動はどうだったんですか、その高校時代。

松本：いやもう私がですね、ほとんど関われなくて、まあ仕事があったっていうのもあったんですけ

ど、保護者会もなかなか参加できなかったりして、実際、中学の時が完全コロナ、もう真っ只中だった。皆さんもね、きっとそうだと思うんですけれども、その中でなかなか学校と関わることができなかったので、高校では関わりたいなとは思ってたんですけれども、ちょっとそのチャンスがなくてＰＴＡ参加できなかったんですけれども、その、だからね。

石垣：ここにいる人たち、みんな関わってる人たち。

松本：もうめっちゃリスペクトです。

石垣：ねえ。

松本：本当に、すごいですと思って。何か今振り返ると、なので、高校に入っちゃうと、ほとんど子どもと、何ていうか、子ども・学校と関わるタイミングってないなと思って、なので、こう、親の方からやっぱりね歩み寄っていかないと、分からないっていうか、実際本当に学校でどういうことがね、なされてるのかとか、どういうふうに頑張ってるのかも見えにくくなるので、何かすごく関わっていくって本当に大事だなと思って。

石垣：ねえ。

松本：はい、思います。

石垣：何か裏方のねスタッフの方なんかも全員みんな普通の親御さんたちだったじゃないですか。

松本：ねえ、そうなんですよ。

石垣：それが椅子運んだり、テーブルね。

松本：うん。

石垣：ＰＴＡ大変だなと思いましたよ。

松本：いや、でも皆さん気が利くというか、何か、しゃしゃしゃしゃしゃしゃと。

石垣:やっぱり基本あるなんじゃないですか。気が利く人たちがやってらっしゃるんじゃないですか。

松本：と思うんですよ。

石垣：ねえ。

松本：うん、多分。

石垣：気が利かないで、ぼーっとしてる人、あまりいませんもんね。

松本：何かありましたら言ってくださいみたいな。

石垣：そうそう、すごいんですよ。

松本：人たちの集団みたいな感じなので。

石垣：いや本当ですよね。

松本：すごくありがたいですね。

石垣：ねえ、本当にね。さあ、今年の春に卒業して無事大学入学。

松本：入学しました。

石垣：おめでとうございます。

松本：ありがとうございます。

石垣：よく聞く大学ですよ。

松本：あ、そうですか。

石垣：受験勉強して頑張ったんでしょう。

松本：頑張ってました。

石垣：親はどうなんですか、その後押しというか。

松本：どう。

石垣：大学受験はどうだったんですか。

松本：大学受験はですね、本当それこそ未知な世界で、私自身も一応大学は行ったんですが、指定校推薦で行かせてもらったので、そのいわゆる一般受験で関門くぐり抜けるってどういうことなのかっていうのを、本当に一緒に歩みながら学ばせてもらったんですけど、何にもできないですね。驚くほど何にもできないっていう。

石垣：夜に何かおうどん作って。

松本：あ、そうそうそう。

石垣：それはやるんでしょう。

松本:やります、やります。でも本当にそれぐらいしかないんですよね、逆に。何か、はっぱかけたって、もうどうしようもないっていうか、あとは自分の人生だし、自分自身がきっと分かってることだしっていうので、基本的にご飯のこと、とにかく体調面のことを、まあ居心地いい空気がつくれればいいかなっていう、あとは基本的に勉強のことは言わないっていうふうに。

石垣：ご主人も言わないんですか。

松本：主人は言い出すと止まらないので、聞かない。

石垣：あまりね。

松本：１個ポンってスイッチ押しちゃうと、わあーってなっちゃうので。

石垣：ねえ。

松本：そのスイッチを押さずに過ごすっていう。

石垣：なるほどね。まあそれがうまく。

松本：そうですね。

石垣：夫婦が回っていくコツっていうことでしょうね。

松本：うん、だから多分主人も、それは自分の何か特性多分分かってて、できるだけ言わないように多分我慢してたと思います。言いたいことはいっぱいあったと思うんですけど、でもそれが良かったのか、何かすごい自分のペースで勉強も進んでいて、本当に頑張って第一志望に、はい。

石垣：ねえ。第一志望なんでしょうね。

松本：はい、合格いたしました。

石垣：今日いらしてる方でもね、結構、今ちょうど受験で大変ですね。ご苦労さまですね。

松本：ねえ。もう、ねえ。本当この時期とかもう、うーんみたいな。

石垣：そうなんです。

松本：オープンキャンパスとかこれからね、もう去年行ってらっしゃる方とか、もう２年前から行ってらっしゃる方とか、本当にたくさんいらっしゃると思いますけど、私はオープンキャンパスも学食の味を見に行っただけで、５校ぐらい行って、中央が一番おいしかったなとか。

石垣：中央は、どっちの中央ですか。

松本：中央大学。

石垣：山の方の、それとも街中。

松本：後楽園。

石垣：ああ、はいはいはいはい。

松本：後楽園の。いやあ、おしいかったなとか、そういうことしか覚えてなくて。

石垣：一緒に行くんですか。

松本：一緒に行きたくて。全然友達同士でね行ったりしてる子もいるんですけど、一緒に行って、あっつい中、夏休みとかもう長蛇の列で並ぶんですよね。なので、何かそういうのもある意味ちょっと私はアトラクションみたいな感じで、一緒に楽しみながら奔走しておりました。

石垣：お子さんの立場になってみれば、松本英子の息子じゃないですか。
松本：はい。
石垣：学校ではどうなんですか。そういうこと言われたとか、おまえの母ちゃん「Ｓｑｕａｌｌ」だろうとか。
松本：あ、それね。
石垣：あれでしょう、当然。
松本：おまえの母ちゃん、おまえの母ちゃん話で言うと、そうですね、卒業式、高校の卒業式の時にですね息子のクラスメイトに話しかけられて、あ、咲太のお母さんとか言って、Ｘフォローしてますって言われて、えっみたいな。インスタフォローしてますとか言われて、何か言われましたけど、そのせいで、どうやら息子が、時々私、息子のことをつぶやいたりしてたんですけど、そのポストをいちいち、その息子の友達が息子に、おまえのこと書かれてたよっていうのをいちいち言ってたみたいで、それでもう俺のこと書かないでって言われました。
石垣：言われて。もう書いてないんですか。
松本：いやあ、時々ちょっと我慢できなくて書いちゃうんですけど。
石垣：今の子たちどうですか。息子さんたち、息子さんとお友達とか見てると。
松本：何か、何て言うんですか、ぐれてないですよね。
石垣：最近の子。
松本：最近の子。
石垣：何か普通のさわやかな子多いですよね。
松本：そうなんです。
石垣：秋田もそうですよ。
松本：何か、えっ。
石垣：あんまり見ない。
松本：見ないですよね。
石垣：うん。昔見たヤンキーとかいないですよ。
松本：そうなんです。
石垣：こんな感じいなくなった。
松本：なかなか見ないですよね。
石垣：なかなか見ないですよ。
松本：なので、本当にみんな好青年で、まあ分かんないですよ、実際はね。もしかしたら親御さんには反発してるかもしれないですけど、でもあんまりその反抗期的なことも、周りでもそこまでは聞かないですね。
石垣：なかったんですか。彼女なんかいないんですか。
松本：いないみたいです。
石垣：要らないんでしょう。何か言ってたんです。
松本:うーん、何か今のとこそこまで興味はいってなくて、男友達と遊ぶのが楽しいって言ってました。
石垣：最近ね、そうらしいんですよ。
松本：だから私も心配して、もう早くね彼女とか連れてこないかなって言って、いつもこうやって待ってるんですけど、だーれも来やしないですね。
石垣：別に格好悪いわけじゃないんでしょう。
松本：いやあどうでしょう。あの、普通です。

石垣：普通ですか。

松本：普通です。

石垣：何かお子さんに望むこととかあるんですか。

松本:そうですね、何か、何でしょうね。まあとにかく今本人は大学は理系に進んでるんですけれど、こうやりたいことがこれっていうふうに定まっていて、そこに向かって選んだ学部っていうのではない、やっぱりまだ漠然としていて、これから探っていって自分のやりたいことを見つけていくんだと思うんですけど、何かそこをこう、これだっていうものが何か、本人の中でやりがいがあるものをとにかく何か一つ見つけてもらえたら、もうそれだけですね。

石垣：もともと理系だったんですか。

松本：もともとちっちゃい時から算数が好きで、数学が好きでっていう感じだったので、逆に国語とか英語とかがもう全然駄目だったので。

石垣：将来何やりたいはまだ話し合ってないし、まだ彼の中にもないみたいな。

松本:そうなんですよ。なので、ちょこちょこ聞いてはいるんですけれど、まだぼんやりしてますね。

石垣：歌手になりたいって言われたらどうしますか。

松本：絶対言わないと思います。絶対言わないっていうか、何回か聞いてるんです。音楽に君は興味がないのかいって。

石垣：だってお父さんだってＳｏｍｅｔｈｉｎｇ　ＥＬｓｅでしょう。

松本：そうなんですよ。

石垣：「ラストチャンス」ですよ。

松本：はい。だから両親が音楽をやっていると本当に両極端で、もう全然興味なくなるか、全く同じことをするかなんだなって思いました。

石垣：じゃあ今は全く興味がない。

松本：興味がない。ただ、ギターを始めちゃったんですよ、どうやら。

石垣：あら。

松本：何か大学に合格した瞬間から、それまで全く興味を示さなかったギターを弾き始めて、今、朝から晩まで弾いてて。

石垣：ああ分かんねえわ、これ。

松本：いや、だから。

石垣：行くな、こりゃ。

松本：いやいやいや、どうね。

石垣：行くわ。

松本：いや、いやあ。

石垣：歌は、歌。

松本：歌ってますけど、下手です。

石垣：ああ、じゃあプレーヤーとして行く気なんじゃないですか。

松本：いやあ。だからもう何かギターをずっと弾いてるから、うん、好きは好きみたいですけど、基本的には会社員になりたい。

石垣：だってギター弾くっていったって、あれでしょう、初心者ってことでしょう。

松本：あ。

石垣：最初から弾いてたんですか。

松本：いや、初めて。

石垣：初めて。
松本：うん、初めて。
石垣：で、弾いてるんですか、もう。
松本：初めて弾いてました。初めて、いわゆる今、ユーチューブですよね。
石垣：ああ、ユーチューブ先生ね。
松本：ユーチューブ先生で、１か月でめちゃめちゃ弾けるようになってて。
石垣：えー。やっぱ才能あるんですね。
松本：いや、多分誰でもやれば、頑張れば。
石垣：すごいわ。
松本：そう。なので、音楽は音楽。で、きっと就職も。
石垣：まあもしね、やりたいっつったら相談に乗るよぐらい。
松本：そうですね。
石垣：ねえ。親としてもね、やっぱ幅きかせたいですよね。
松本：いやいや、そういう、そんなことはないですけど。
石垣：いろんなコネクション使いますよね。
松本：ねえ。
石垣：ねえ。
松本：まあ。
石垣：まあね、そこは見てみようって感じですか。
松本：あまりお勧めはしない。
石垣：ねえ。あれですか、その今の息子さんに、じゃあこれから大学まだ４年あるわけですよね。
松本：はい。
石垣:で、こうなってほしいとか望むものってあるんですか。こういう人間になってほしいみたいな。
松本:あ、でもそうですね、何か、うーん、人としては、まあ今もずっと言ってますけど、とにかく挨拶、挨拶することと感謝することというのを、それは誰に対しても変わらない人であってほしいなと思って、それはいつもずっと言ってますね。うん、何か、まあそれがおのずと自分に返ってくるというか。
石垣：ねえ。年取ると分かるんですよね。
松本：ねえ。
石垣：感謝の意味がね。
松本：本当ですよね。痛いほど。
石垣：何か若い時、分かんなかったんでしょうね。
松本：うん、不思議ですよ。
石垣：本当ね。
松本：はい。
石垣：じゃあ今日は、せっかくこんなに東北各地からおいでいただいたんで、英子さんから歌をプレゼント。
松本：はい。
石垣：していただく。え、あの、歌の最中は写真やめてくださいね。僕としゃべってる時だけ、あと動画もね、やめていただいて。じゃあせっかくですからね。
松本：はい。

石垣：あ、で、歌終わったら質問コーナーやりますから、質問、歌を聞きながら質問考えといてください。お願いします。

じゃあ、もうこっからステージは英子さんにお渡ししますので。

松本：はい。

石垣：よろしいでしょうか。

松本：分かりました。

石垣：じゃあお願いします。

松本：はーい。

改めまして松本英子でございます。よろしくお願いいたします。（拍手）ありがとうございます。もう先ほどからいろいろね、お話をさせていただいた中でありました「Ｓｑｕａｌｌ」という楽曲なんですけれども、もうこの曲から２７年経ちまして、１９９９年の楽曲になります。もうね、当時は本当にフレッシュな気持ちで、１９歳の時のレコーディングでしたけれども、そこから今の「Ｓｑｕａｌｌ」を聞いていただけたらと思います。ちなみに私の歌を初めて聞かれる方いらっしゃいますか。手を挙げてもらって。あ、いいんですよ、遠慮なく。あ、ありがとうございます。うれしいです。ちょっと今日、会長も不調でしたが、私も鼻声なんですね。ちょっとレアな鼻声「Ｓｑｕａｌｌ」をお届けしちゃいますが、心を込めて、皆さんもちょっと初恋のあの頃の気持ちとか思い出していただきながら、是非聞いていただければと思います。

「Ｓｑｕａｌｌ」（演奏）



松本:（拍手）「Ｓｑｕａｌｌ」お届けしました。さあ続いて、もう一曲だけ歌わせていただければなと思いますけれども、息子がですね、まだ小さい、五、六歳の頃だったと思うんですけれども、その時にですね長野県にあります善光寺というお寺さん、皆さんもご存じだと思います。善光寺さんにですね奉納させていただいた曲というのがあります。奉納コンサートの際にですね、平和をテーマに楽曲を書き下ろしてほしいということでご依頼いただきまして、もう随分前になりますけれども、書きました。その平和っていうのは本当に大きな大きなテーマで、自分の中でもどんなふうに曲に、言葉にしていくべきかというのをすごく考えました。で、いろんな方向から平和を描いていたんですが、その時に私はやっぱり一番リアリティーを持ったのがやっぱり子どもたち、自分の息子をはじめとする本当に子どもたちの未来がいつまでも平和であるようにという、そんな願いを基に書いた曲があります。皆様もお子様の成長を日々見守りながら、ただ今の情勢でしたり、日本の状況も含めて、どんな未来になっていくのか、すごく不安な部分があると思いますが、大切なのは、本当に今いらっしゃるお一人お一人の思い、そこがね、平和を願うという気持ちが増えれば増えるほどリアルにつながるんじゃないかなと、そんなふうに思って私が歌を書きました。今日は思いを込めてお届けしたいと思います。「祈り灯」という曲を聞いてください。

「祈り灯」（演奏）

松本：どうもありがとうございました。（拍手）ありがとうございます。
石垣：ありがとうございました。
松本：ありがとうございます。
石垣：ありがとうございます。
松本：うれしい。ああすごい。ありがとうございます。
石垣：うれしいですね。
松本：うれしいです。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：あったかいですね、皆さん。
松本：いや本当です。とてもうれしい。
石垣：ねえ。今日、歌２曲も聞けてラッキーでした、皆さん。
松本：いやいやいや。
石垣：いやあ秋田に行って良かったなって、多分ね思ってると。
松本：ええ、そうですね。各地からいらっしゃって、ありがとうございます。
石垣：ありがとうございます。
松本：はい。
石垣：さあデビューして、じゃあ今年何周年。
松本：２７周年で。
石垣：２７周年。
松本：はい。
石垣：じゃあ３０周年目指してですね、とりあえずは。
松本：そうですね。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：では、同業の方でも、当時歌ってた方でも、どんどん多分、あのね、いなく、亡くなったりしてないですけど、やめてった人たちも多いじゃないですか。
松本：あ、そうです、音楽をね。
石垣：ねえ。
松本：はい。
石垣：続けてく原動力みたいなのってありますか。
松本：いやあ、あの、本当に毎年モチベーションって、まあね、石垣さんもながーく続けていらっしゃるから。
石垣：いやいや、長すぎて、はい。
松本：もはやいろいろ越えて何周も回ってると。
石垣：何周、そうです。
松本：思うので、私が伺いたいぐらいなんですが。
石垣：６４ですね。
松本：えー。
石垣：６４。
松本：ねえ。

石垣：本当おじいちゃん、来年から年金。
松本：年金。いいですね。
石垣：うん。
松本：何かね、そのモチベーションってなかなかこうキープって難しいじゃないですか。
石垣：難しいですね。そうですね。
松本：ねえ。私も同じで、でもやっぱり本当に自信がなくなったり、あ、これから本当に続けられるんだろうかって思うたびに、やっぱり初心に返るというか、やっぱり地元秋田で育ててもらった皆さんに恩返しをまだできていないってすごく思うので、恩返しをするために自分はまだまだ頑張るぞっていう気持ちと、あとは息子がライブに最近来てくれないんです。
石垣：あら、お母さんの。
松本：もうここ何年も見に来てくれなくて、悔しいんです。なので、次、息子が来た時にギャフンと言わせてやろうというか、母ちゃんすげえなって思わせるためにも、ちょっと頑張りたいです。
石垣：それいいモチベーションですね。
松本：そうなんですよ。だから来ない方がいいのかっていう気もしますけど。
石垣：いやいやいや。
松本：いつかね見に来てほしいなって思います、はい。
石垣：いいですね。さあ質問、あと時間もね少なくなってきました。もし質問あれば、マイクね、いらっしゃるんですよ。皆さんと同じ、多分同じＰＴＡの方で、何かありますか。はい。ないですか。
松本：え、そんな。
石垣：ないですか。
松本：皆さん遠慮がち。
石垣：遠慮がちですね。何かないですか。
松本：何かない。
石垣：何かないですか。大体こうやって見るとね、だんだんこう目線外していくんですよね。
松本：私の同級生が来てるはずなんですよ。
石垣：あら。ああいた、いらっしゃった。もうあそこに両手。
松本：あ。
石垣：同級生。
松本：違います。
石垣：ああ、じゃあ彼のところに。
松本：同級生。あ、同級生だったりして。
質問者（八戸商業高等学校ＰＴＡ会長　千葉毅）：青森県から来ました、八戸商業高等学校という学校でＰＴＡ会長をさせていただいています千葉毅といいます。今日は素敵な歌、ありがとうございます。



松本：とんでもないです。
質問者（千葉）：実は自分、松本さんと同じ年で。
松本：あ、はい。
質問者（千葉）：同級生ではないんですけど。
松本：あ、もう同級生です。

質問者（千葉）: １９７５年に生まれた時に、ちょっと思い出したのが、福山雅治さんの「Ｓｑｕａｌｌ」ってすごく自分もその時好きで、よくカラオケで歌ってたんですね。

松本： あ、ありがとうございます。

質問者（千葉）: で、その時に松本さんの歌う「Ｓｑｕａｌｌ」を聞いた時に、ちょっと嫉妬したんですね。

松本： はい。

質問者（千葉）： すごい本当に好きすぎて、もう物真似してるくらいのレベルで好きすぎて、松本さんがそれをカバーで歌った時に、何で俺じゃねえのよっていうね勘違いから、あの。

松本： 良かったら。

質問者（千葉）： いやいやいや、とんでもない。それがきっかけで松本さんっていうことを知ったきっかけになったんですね。

松本： はい。

質問者（千葉）： で、松本英子って何か聞いたこと、「Ｓｑｕａｌｌ」、ああって思って、すごく今ここで当時のことを思い出しながら、めちゃくちゃちょっと。

松本：あ、今まさに。

質問者（千葉）： まさに。

松本： あら。

質問者（千葉）： 感動してたんですね。

松本： ああ、うれしいです。

質問者（千葉）： はい。で、やっぱりそのＰＴＡってその時思った時に、多分いろんなことってすごい覚えてるんですけど、どっかでやっぱり忘れちゃってることっていうのもすごく多いんだなって。でもこういったことをきっかけでまた思い出す。あ、これってつながるんだよな。ウェルビーイングって、まさに今のＰＴＡなのかなって、すごく今ちょっと感動してました。

松本： ああ、うれしい。

質問者（千葉）： それで、質問っていうよりも、何ていうんですかね、さっき松本さんの話してたことで思ったのが、やっぱりこれからのＰＴＡとか、つながる絆であったりとかっていうのは、やっぱりこういった場っていうのですか、そういったものを松本さんもどんどんやってほしいなって思います。

松本： あ、ありがとうございます。

質問者（千葉）： 本当に。こういう、なかなか自分たちもこうＰＴＡ参加してる人、してない人っているんですけど、やっぱり何が一番大変って、してない人にこれをどうやって伝えたらいいのかなってなった時の発信源に、是非松本さんなってほしいなっていう。

松本： 大丈夫ですか。ＰＴＡ経験ないんですけど、大丈夫。

質問者（千葉）： なくても、やっぱりつながるんですよ、やっぱり。

松本： はい。

質問者（千葉）： はい。本当にそういう思いと、やはりこういう場をつくってくださってるＰＴＡの連合会であったり、そういうのってやっぱりすばらしいなって改めて思う機会をいただきました。

松本： ありがとうございます。

石垣： ありがとうございます。

松本: 私、でも今のお話を聞いて、逆に皆さんに質問したいんですけど、立候補なんですかね、皆さん。どうなんですか。

石垣： どうなんですか。

質問者（千葉）：結構好きで、私やりたいですっていう人も多分いると思います。
松本：じゃんけんで負けた人とかもいるんですか。
質問者（千葉）：でも、あるかもしれないですね。自分が小学校、中学校の時は、もうＰＴＡ会長やりたいっていう人が結構いて。
松本：ですよね。
質問者（千葉）：はい。でも僕の場合は、高校の時はもう先生に、千葉さんどうって。
松本：あ、もう先生から。
石垣：もう名前が売れてたんですよ。
質問者（千葉）：いえ違う。だから。
石垣：先生の間で。
松本：ねえ。
質問者（千葉）：でもやっぱ誰もいなかったので、誰もいないんだったらやるしかないよね。
松本：あ、すごい。
石垣：偉いよね。
松本：このね、本当にだからその皆さん責任感がある人の集団じゃないですか。
石垣：そうそうそう。
松本:すごいなと思って、私もう隠れてましたから。そういうのは駄目ですねと思って、やっぱりね。
石垣：俺もそれ偉いと思うな。
松本：自分から行く。
石垣：うん。
松本:ちなみに、じゃんけんでなった人いますかね。ちょっとこれ。そんな人いるのかな。立候補ですか。
質問者（千葉）：あ、います、います。
松本：あ、じゃんけんの人いる。あ、ああ。
石垣：やっぱいるんだ。千葉さんありがとうございました。
質問者（千葉）：はい、ありがとうございます。
松本：ありがとうございました。
質問者（千葉）：すいません。ありがとうございます。（拍手）
石垣：やっぱり青森の人は元気あるねみたいな感じね。
松本：うん。
石垣：青森人は元気あるね。
松本：青森の人、元気ある。
石垣：ねえ。本当、何かあれですもんね、青森の人って自分とこに自信持ってるじゃないですか。
松本：あ、なるほどね。
石垣：ねえ。だからほら、芸能界の方でも言葉どんどんきれいね、あ、地元の言葉で。
松本：地元ね、王林ちゃんとかね。
石垣：王林ちゃん。
松本：うん。
石垣：秋田の人、ちょっと格好つけるっすもんな。
松本：そうね。
石垣：ねえ。そこなんだよな。
松本：いやあちょっとやっぱりな。

石垣：ちょっと青森の人、見習われねば駄目だな。
松本：いやあ。
石垣：あとどたなかいらっしゃいますか。
松本：ねえ。何でもいいですよ。
石垣：何でもいいんですよ。
松本：いや絶対きっとね、立候補。
石垣：ああ、あちらあちら、いらっしゃった。
松本：ああ、ああ、いらっしゃいました。
石垣：僕、こういうの見つけるの早いんです。
松本：私、こういう時に挙げられる人、すごいなと思うんですね。
石垣：ねえ。お願いします。
質問者（福島県立若松商業高校　佐藤充）：福島県の若松商業高校の佐藤と申します。
石垣：ようこそ。
松本：ようこそ。



質問者（佐藤）：今ですね、すばらしい歌声聞かせていただいて本当にありがとうございました。感動しておりました。私、初めてちょっと聞かさせていただいたんですけども、福山さんが提供されてくれたということで、何かその福山さんとのエピソードなんかあったらばちょっとお聞かせいただければなと思います。
松本：はい、ありがとうございます。先ほど千葉さんがね、福山さんで知って、で、カバーをって言ったんですけど。
石垣：逆なんですよね。
松本：逆なんです、千葉さん。
石垣：逆なんですよ。
松本：私が先なんです。
石垣：そうそうそう。そうなんです。
松本：そうなんです。福山さんはセルフカバー。
石垣：そうそうそう。
松本:されてるので、実は、ちょっとだけ私の提供の方が先なんです。なので、まあ、全然大丈夫です。でもね、よく言われますし、あと、これがデビュー曲なんですかとも言われるんですけど、デビュー曲じゃないし、セカンドシングルなんですけど、そもそもは、その「パーフェクトラブ！」というドラマがありまして、そのドラマの中の挿入歌として福山さんが書き下ろしをされて、で、その中でオーディションをしたんですが、その時に福山さんの前で歌うのが一番最初のオーディション。
石垣：何人ぐらいいたんですか。
松本：あ、私は知らされてなくて。
石垣：あ、そうですか。
松本：なので、行ったら私一人だったんです、まず。で、歌う前にマンツーマンで面接。
石垣：えー。
松本：なので、いきなり行ったら福山雅治みたいな。

石垣：あのまんまですか。

松本：あのまんまでした。すごく優しい方で、ちょうどその面接をする時に階段、ちょっと狭い階段をこう上がっていく時に、目の前に福山さんが上がってて、先に。お尻のちっちゃい人だなと思って、あ、お尻ちっちゃいな。まだ１９歳だったと思うんですけど、はあって思いながら、オーディションを受けて、その時に、それこそ私、高校時代ソフトボールをやってたんですけど、その時の監督が福山さんにそっくりだったんですよ。

石垣：えー。

松本：めちゃめちゃイケメンで、多分、高校の先生もいらっしゃいます、今日って。

石垣：誰先生。

松本：学校の先生。高校の先生。カサハラ先生って知ってますか。

石垣：あ、知ってるか。

松本：知ってる人います。

石垣：ええ、教育長知ってるそうです。

松本：あ、カサハラ先生が私、監督だったんですけど、福山って呼んでたんですよ。

石垣：へえ、すごい。

松本：それで、すっごいイケメン、今ちょっとどうなってるか分からないですけど、ちょっと現状は分からないですが、私が高校生の時は本当に福山さんみたいで、もう大人気の先生で、私も失礼なことに福山さんとその初めてお会いした時に、あ、私の監督にそっくりですって言っちゃったんですよ。

石垣：言っちゃった。

松本：そしたら、よっぽどイケメンだねって返されました。

石垣：上手だね。

松本：さすがと思って、こうやって返すのかと思って、そこで学ばせていただきましたけど、そうなんです。

石垣：それで歌って。

松本：それで、「Ｓｑｕａｌｌ」のいわゆる原型となるデモテープ、福山さんが作ってくれたそのデモテープ、まだ歌詞がついていないラララの「Ｓｑｕａｌｌ」を歌って、で、それがオーディションだったんですね。

石垣：それで決定して。

松本：はい。

石垣：で、シングルで。

松本：シングルになりました。

石垣：出してもらって。

松本：はい。

石垣：その後、何か松本英子に送った曲が売れちゃってて、俺もセルフカバーしちゃおっかなあみたいに。

松本：どう、分かんないですけれど。

石垣：多分そんな感じですよ。

松本：どうなんだ。

石垣：しちゃったら、また売れちゃったなあみたいな感じ。

松本：ねえ。でも本当に、だからね、結局、男性もカラオケで歌っていただけるようになったので、

そんな感じのエピソードで大丈夫ですか。

石垣：いいですか。

質問者（佐藤）：ありがとうございます。

石垣：会津からだと、どうやって、車で来るんですか。

質問者（佐藤）：車で５時間かけて来ました。

石垣：ああ、ようこそ。

松本：ありがとうございます。

石垣：ありがとうございます。そうですよね。

松本：帰りもお気をつけて。

石垣:ねえ。そうだ、そうだ。あともう一人ぐらい、それで終わりにしますよ。あと、はい、いますか。はい、あ、いた、後ろ。どうぞ。

松本：あ、ありがとうございます。

石垣：青森来て、福島来て。

質問者：（福島県立安積高等学校ＰＴＡ会長　伊藤元治）すいません、私も福島県からまいりました。

石垣：あ、いらっしゃいませ。



松本：いらっしゃいませ。

質問者：福島県立安積高等学校ＰＴＡ会長をしております伊藤と申します。

石垣：はい。

質問者（伊藤）：今日は素敵なお話と歌をありがとうございました。

松本：とんでもないです。

質問者（伊藤）：松本さんのお話の中で、高校に行かない選択肢もみたいなお話があったと思います。

松本：はい。

質問者（伊藤）：私の娘もすごくのめり込む性格で、ちょうど今３年生なんですけども、ちょうど３年前、高校受験の今ぐらいの時期に、私は夢があるので高校に行かないというお話をされたことがあって、すごく重なる部分がありました。

松本：はい。

質問者（伊藤）：まあそののめり込む性格だというのは分かってたので、いや待て待てと。で、やっぱりその３年間、高校３年間の中で、今やりたいことがあったとしても、高校３年間の中でもっと夢が広がるかもしれないよっていうふうに丸め込んで高校に何とか行かせて今に至るんですけれども。

松本：すごい。

質問者（伊藤）：はい。松本さんのその夢を目指す中で、やっぱり高校３年間はっていうお話があったと思うんですが、ご自身が夢をちょっと抑え込みながら３年間高校生活、まあ大学の方に行きながらの中で、やっぱり中学から高校行かないでじゃなくて、高校、大学と行って良かったなっていうふうなエピソードがあれば、人生の先輩として娘にいただければと思います。よろしくお願いいたします。

松本：ありがとうございます。

石垣：ありがとうございます。

松本：いやあ、何か他人事とは思えない。

石垣：ねえ。

松本：よくぞ丸め込みましたね。親御さん大変ですよね。当然自分の思うとおりには進んでくれないじゃないですか、子どもって。何か、何でもかんでもやっぱり自分の分身ではないんだなって、大きくなればなるほど本当に思うことが多いと思うんですけど、何か私の母もそんな思いを持って私にいろいろ言葉をかけてくれたんだろうなと思うんです。私がその中学から高校に行きたくないって言った時も、もう母はもう、ふだんだったらすごい剣幕で怒るタイプなんです。何やってんのーみたいな感じだったんですけど、あまりに驚いて、ちょっともう、何ていうか、逆に冷静な感じで、ちょっと待ちなさいと。一旦考えてみようかっていうのを、いつもだったら結構、何ていうか、上からガンと言って。

石垣：頭ごなしに。

松本：頭ごなしに言ってたと思うんですけど、これは、こいつは本気だなっていうのを多分母なりに分かって、あと私の負けん気の強さも分かってるので、じゃああと３年、高校３年間、今あなたが持ってる夢は分かったと。だけど、さらに３年、同じ熱量でその夢を追いかけられるか試させてって言われたんですよ。うわっと思って、よいよいよいみたいな、そうやって言われたら、いやあ私だって３年ぐらい熱い思いでやりますよって思ったのがすごくバネになって、そこから、でも絶対に手は抜かない、学校に行ったからにはやることは手を抜いちゃ駄目だよっていうのは言われたんですけれど、何かそれで火がついて、とにかく、じゃあ高校に行ったらバンドを組もうとか、何か違う形で自分の夢を実現するための近道を探していくんですよね。だから何か、多分その子その子に与えられた環境の中で頑張るんだと思うんですよね。その頑張りがやがて本当に自分の肥やしになって、やっぱり高校の時に組んだバンドの活動っていうのも自分の今の活動につながってますし、その時の当時夢をかなえた時っていうのは、私、オーディションが国体予選の翌日だったんですね。ソフトボールの国体予選でピッチャーをして、その翌日に東京でオーディションだったんですが、東京オーディションの前に曲を覚えなきゃいけなかったんです。課題曲を。でも、国体があるから練習しなきゃいけない。

石垣：うん、練習しなきゃいけないね。

松本：でも歌も練習しなきゃいけない。どうしようかと。そしたら、その遠征先でチームメイトがみんなで覚えてくれたんですよ。

石垣：へえ、すごい。

松本：全員が。みんなが、英子がオーディションあるから、ちょっと国体も大事だけども、一旦オーディションも大事だって言って覚えてくれて、まあ国体残念ながら負けちゃったんですけど、私のせいかもしれないですけど、負けちゃって、その翌日、私もオーディションに送ってくれる、みな、私が、仙台からだったんですけど、仙台から東京に行くその飛行機に乗る前のタクシーで、みんなその課題曲を熱唱しながら送ってくれたんですよ。絶対受かってこいよーって言って、それが原動力になって私は合格したんですよ。なので、何かやっぱりそういう道のりがなければ、多分たどり着けなかったって思うので、何か今ある試練は必ず自分に返ってくるって思ってもらって、娘さんも是非かなえたい夢を、父ちゃんに負けずに、父ちゃんの試練に負けずにかなえてほしいなって思います。

石垣：ええ話や。

松本：是非よろしくお伝えください。

石垣：いい質問ありがとうございます。



質問者（伊藤）：ああ、とんでもないです。ありがとうございました。

石垣：ありがとうございます。（拍手）

松本：ありがとうございます。

石垣:お､何でしょうか｡ちょうどいい時間ですね。

松本：はい。

石垣：お腹すいたでしょう、皆さん。

松本：もうね、お昼タイム。

石垣：お昼タイム。

松本：うん。

石垣：きぱっと終わりますから、５５分でね。じゃあ最後に、皆さんにエール。

松本：はい。

石垣：まあ秋田の人もいますので、秋田へのエールと、あとは皆さんへのエールお願いします。

松本：はい。今日は東北あちこちから、そして県内もたくさんの場所から足を運んでいただいてありがとうございます。そして、このような場所にお声掛けいただきまして、とても光栄に思います。ありがとうございました。

本当に改めて、このねＰＴＡ、皆さんやられてる中で、お仕事があったりとか、おうちのことがあったりしながら、それからもう子育てしながら、もう本当にいろんな中で、忙しい中でＰＴＡ活動されてると思います。で､私も何でやらなかったんだろうって後悔するぐらいだったんですけれど、子どもと関われる時間って本当に短いんだなっていうことを、今、大学に通わせていながら実感しています。もちろんもうね成人されてるお子さんいらっしゃる方もいらっしゃるかもしれないんですけれど、本当に高校って、ある意味ね、親元でこうそばにいられる最終の段階なんじゃないかなと思うので、一日一日を大切にＰＴＡとしても子どもたちを見守っていただけたらなと思いますし、私も一生懸命応援させていただきたいと思います。

そして、私の大好きな秋田というまち、今回もしかしたら初めていらっしゃった方も、何度か来られてる方もいらっしゃると思いますが､是非秋田も楽しんで帰っていっていただけたらと思います。本日は本当にありがとうございました。

石垣：ありがとうございました。（拍手）

司会：ありがとうございました。素敵なお話、そして素敵な歌声にね、本当うっとりしました。ありがとうございます。





あきた総文２０２６
高校生実行委員会からのPR

会場の皆さん、こんにちは。あきた総文２０２６生徒実行委員です。本日は大会ＰＲにお時間をいただき、誠にありがとうございます。

先ほどのあきた総文２０２６合同合唱団によるすばらしい歌声、皆様の心にも響いたことと思います。実は、彼らのような文化部の生徒たちが目標とする文化部のインターハイが、いよいよ今月２６日から、ここ秋田県内の８つの市を舞台に開幕します。第５０回全国高等学校総合文化祭、愛称「あきた総文２０２６」です。第５０回という記念すべき節目の大会であり、秋田県での開催は実に４５年振りとなります。全国の予選を勝ち抜いた約２万人の高校生が秋田に集結し、すばらしい作品や日頃鍛え抜かれた技、表現力を存分に披露します。私たち生徒実行委員会も、全国の仲間を最高のおもてなしでお迎えするため準を進めてまいります。

私たち高校生が全力で好きなことに打ち込み、輝くことができるのは、日頃から一番近くで支えてくださる保護者の皆様、ＰＴＡの皆様の温かいサポートがあってこそです。是非皆様も各会場へ足をお運びいただき、全国トップレベルの高校生の熱気と青春の輝きを直接肌で感じてみてください。あきた総文２０２６へのご支援とご来場を心よりお待ちしております。

この後に続きます研究協議が皆様にとって実り多き時間となりますことをお祈り申し上げます。

本日はありがとうございました。







第 75 回東北地区高Ｐ連
秋田大会　研究協議

〔研究協議テーマ〕

地域・家庭・学校つながる応援隊！
　～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる”ＰＴＡ活動とは～

○　コーディネーター　瀧澤　徳彦（秋田県生涯学習センター
　　シニアエキスパート(兼)社会教育主事　元高等学校長）

○　助言者　　松川　敦志（秋田魁新報社 取締役 統合編集本部長）

○　発表テーマと発表者（発表順）

県　名	発　　表　　題	発表者・所属校
福　島	あてになる人、目をはなせる人、心身ともにたくましい人を育てるＰＴＡ活動 ～福商の保護者と学校の連携協力による健全育成活動～	福島県立福島商業高等学校 ＰＴＡ会長　志賀　学
山　形	子どもの挑戦を支える黒子の絆 ～天童夏祭り、郷土とのつながり～	山形県立天童高等学校 ＰＴＡ会長　安達　勇一
宮　城	さくら高祭で深まるＰＴＡ活動	宮城県田尻さくら高等学校 ＰＴＡ会長　佐藤　由美
岩　手	ちょっとの参加で、ずっと見守るＰＴＡへ ～小規模校にこその“顔の見える支え合い”の力～	岩手県立軽米高等学校 前ＰＴＡ会長　立桶　善孝
青　森	つながるＰＴＡ研修をめざして ～人とつながる、地域とつながる、未来とつながる～	青森県立むつ工業高等学校 ＰＴＡ会長　山崎　明男
秋　田	地域・故郷とともに子どもを育むために ～ＣＳ（コミュニティ・スクール）を起点としたＰＴＡのインクルーシブな展開～	秋田県立ゆり支援学校 ＰＴＡ会長　金子　宗元

あてになる人、目のはなせる人、心身ともにたくましい人を育てるPTA活動
～保護者と連携協力による健全育成活動～



発表者 志　賀　　学
福島県立福島商業高等学校ＰＴＡ会長

皆様こんにちは。福島県立福島商業高等学校ＰＴＡ会長の志賀学と申します。本日、ＰＴＡ活動の発表をいたします。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

まず発表のお題といたしまして、「あてになる人」、「目のはなせる人、心身ともにたくましい人を育てるＰＴＡ活動」「保護者と連携協力による健全育成活動」を今回の発表のお題として進めさせていただきます。

学校紹介とまとめの方は、冊子の方をご覧ください。

まずＰＴＡ活動の方、説明させていただきます。

本校のＰＴＡ活動は、各クラス２名の役員によって編成される委員会に所属しての活動が中心となっております。まず１つ目ですが、進路対策、２つ目に健全育成、３つ目に調査広報、４つ目に厚生、こちらの４つの委員会があります。近年は、どこの学校もそうだとは思うんですが、保護者も教員も多忙化解消のため、研修旅行や教養講座によっての親睦を図るようなことは今は減少傾向にある状況です。

経済的教育活動支援の方は、最後の方に改めて説明させていただきます。

まず、進路対策委員会の説明です。進路対策委員会は、コロナ以降、活動の実績がありませんでした。今年度の令和８年度も活動は未定となっており、以前までは高Ｐ連の進路研修会に参加しておりましたが、現在は校内の進路指導部と各学年による進路説明会を開催し、生徒と保護者が共に参加して、３年生などの進路決定に役立てております。

続いて健全育成委員会。こちらは、主に活動としては交通安全活動を行っております。６月、９月、１２月、年３回、教員と保護者によって街頭での自転車安全運転一斉指導を行っております。生徒の通学路で交差点などの結構危険な箇所がありますので、そちらの数か所に先生と共に出向いて、交通ルールを守っての自転車走行と歩行者の安全を守っております。自転車事故は毎年数件発生していますが、間違いなく減少傾向にはある状況です。



続きまして調査広報委員会。こちらは年に２回、ＰＴＡ会報の「しのぶ野」を発行しております。こちらは学校の様子を保護者の皆様に実際に取材していただいて、保護者目線での編集、さらには発行をしております。１２月に広報紙のコンクールへの参加することも目標となって

おります。こちらがその「しのぶ野」の内容になります。こちらは年度始めの校長の挨拶、校舎案内、時程、教員の顔写真なども挙げて掲載しております。なるべく学校の様子が保護者の方にも分かるように、配慮をしております。

続いて厚生委員会になります。こちらは年に２回、９月と２月に学校保健委員会に参加して、生徒と健康について教員、学校医と共に考えております。コロナやインフルエンザの感染防止に大きな力となっております。

続きまして経済的支援について少しお話させていただきます。

ＰＴＡの会費といたしまして９,０００円徴収しておりまして、教育活動後援会費、こちらは１万４,０００円、あと空調会計として７,５００円を集めております。さらに進路指導運営費としても３年生からは３,０００円徴収している内容です。教育活動後援会は、部活動の大会出場を支援しています。空調会計は、平成２９年から始まっている福島県で県立高校の教室へのエアコン設置の補助金、こちらは平成３０年から始まっています。福島商業高校では、それよりも１年早く、保護者の賛同を得てエアコンを設置することができました。先見性には感謝しております。さらに、令和２年からは、保護者の賛同で体育館へエアコンが設置され、体育の授業と部活動の、今も結構問題視されていますが、熱中症防止、大きな効果を上げております。

PTA活動　5

○教育活動後援会
体育・文化振興のため各種大会出場の援助を行う
○空調会計
県の補助金と保護者負担金で教室及び体育館にエアコンを設置する。
＊平成29年に開始した
（県下一斉は平成30年に開始）

その他活動といたしまして、教員の服務倫理委員会への参観があります。こちらは年に１回、教員研修の場に実際私たちも参加して、教員の研鑽の様子を参観します。

また、３年に１回の福商祭、文化祭となっております。文化祭では、ＰＴＡの活動として食堂を運営して盛り上げております。前年度は豚汁、あとは校長先生が蕎麦打ち、実際にしていただいて皆さんに食べていただきました。



続いて福島商業高校の健全育成活動については、交通安全指導、身だしなみを整える指導、心のケア、保健指導、食育指導、いじめ防止指導、ＳＮＳの利用制限指導などが実際に行われている内容になります。

続きまして、こちらが毎朝の登校の指導の様子となっております。保護者と教員一同、危険な場所でこのような登校の指導を行っております。

最後に、現在の本校の健全育成の課題を２つ挙げます。

１つ目は、自転車通学時のヘルメットの着用率を上げるというところで、着用率が現在低い状況になっております。全校集会で生徒指導部からの啓発を行っておりますが、まだ全員着用には至らない状況になっております。まああくまで着用は努力義務であって、実際のところ強制まではしておりません。

２つ目ですが、部活動に関する内容になっておりまして、部活動は４月の登録時に全生徒が何かしらの部活に加入しますが、活動実態のない生徒がおります。で、現在部活は全員加入を原則としていますが、個人の選択をさせることも必要だという考えもありますので、これに関してはあくまで強制はせず、生徒たちの自主性ですかね、自主性に重きを置いてお願いしているところであります。

課題

○自転車通学時のヘルメット着用
・現状は着用を推奨しているが着用率は低い。

○部活動加入の自由化
・現状は全員加入だが、登録だけで実態のない生徒もいる

以上２つが健全育成の課題ということになっております。

以上で福島商業高校の発表を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

生徒の挑戦を支える黒子の絆
～天童夏祭り、郷土とのつながり～



発表者 **安　達　勇　一**
山形県立天童高等学校ＰＴＡ会長

皆様こんにちは。私は山形県立天童高等学校ＰＴＡ会長の安達勇一です。本日は「生徒の挑戦を支える黒子の絆～天童夏祭り、郷土とのつながり～」と題しまして、私たちの活動を報告とさせていただきます。

初めに、簡単ではございますが、学校紹介をさせていただきます。

山形県立天童高等学校は、大正９年に創立され、１０５年を超える歴史を持つ伝統校です。現在は「文理総合」「ビジネス総合」「福祉保育総合」の３つの系列を設け、生徒は自分の進路に応じた授業を選択し、主体的に学んでいます。将棋の駒生産量日本一を誇る「将棋のまち」天童において、地域に根ざした教育を大切にしてまいりました。

コロナ禍にもたらした断絶で、しかし、近年の社会情勢の変化、そして何よりコロナ禍という未曾有の事態は、学校と地域の物理的な接点を断絶させました。高校３年間、一度も地元のお祭りを経験せずに卒業していく生徒たちもいました。

「全員参加」から「意志ある参加」。本校の伝統行事の一つとして天童の夏祭りへ参加があります。以前は学年全員参加が通例でしたが、コロナが明けて再開に当たり、学校では今までのやり方を変更しました。それは一律の強制ではなく、自らの意思で天童のために踊りたいという生徒を募る希望者制へと変更です。結果として約５０名の有志が集まりました。規模は縮小しましたが、そこには主体的に祭りを楽しみたいという強い意思があったからだと思います。



「黒子」としてのＰＴＡの役割。私たちＰＴＡの役割は、生徒主役たちが安全に全力で輝ける環境を整える、黒子に徹するということでした。真夏の夜、パレードで踊り続ける生徒たちの体力消耗は想像以上に激しいものです。私たちは生徒たちが安全に踊れるよう、先生方と打ち合わせを重ねました。当日、水分補給用の飲料やクーラーボックス、補食、そして花笠などを車で運搬し、待機場所までの準備をサポートしました。



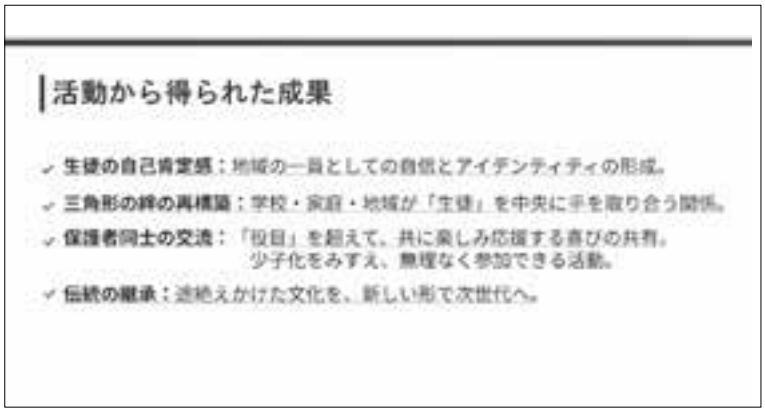
伝統の象徴、「天駆ける」。パレードの最前列を飾るのは、かつてＰＴＡが寄贈した「天駆ける」と

大きく書かれた横断幕です。文字どおり、生徒たちが地域を駆け抜ける象徴です。パレード中、私たちは最後尾や隊の横側から体調不良者がいないか注意を払い、わずかな休憩時間では冷えた飲料を手渡す給水サポートを行いました。一見、小さな活動ですが、この献身的な動きこそ、働きこそが応援隊の姿そのものであったと感じています。



祭り当日、沿道からは温かい声援が多く寄せられました。ＯＢの先輩方たちも多く見に来てくれました。生徒たちは地域社会とつながりを肌で感じ、自信に満ちあふれた表情を見せてくれたと感じています。また、我々保護者も、子どもたちを支える中で、役員同士の絆を深め、自分たち自身が地域の一員として祭りを楽しむことができました。

活動から得られた成果。天童高校も学級数の減少により、ＰＴＡ役員の人数や活動が縮小されてきています。今回の活動を通じて、ＰＴＡは子どもたちに伴走しながら、自分たちも無理なく、楽しみながら応援することができると感じました。保護者同士の絆も深まり、学校、家庭、地域の三者が生徒を中心に置いて手を取り合い、三角形の絆が再構築されたと思います。



最後に、将棋の駒には「小さな歩が成って金となる」という教えがあります。一歩一歩の歩みは小さくとも、地域のつながりを保ちながら歩み続ければ、その一歩はやがて子どもたちの未来を照らす大きな力となります。私たちはこれからも、子どもたちの一番身近な郷土の応援隊として、この三角形の絆を大切に歩んでまいります。

ご清聴ありがとうございました。





さくら高祭で深まるPTA活動
～無理なく、楽しくをモットーに～



発表者 佐　藤　由　美
宮城県田尻さくら高等学校ＰＴＡ会長

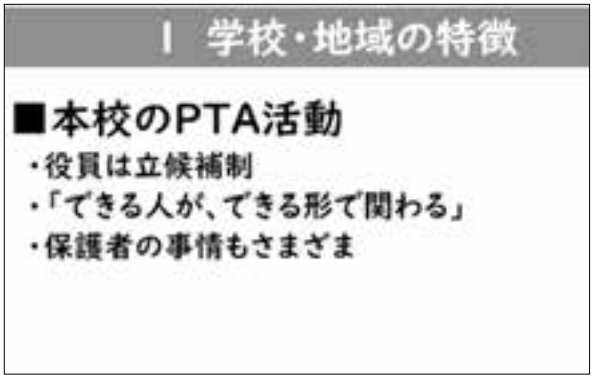
宮城県田尻さくら高等学校ＰＴＡ会長の佐藤由美です。本日は、「さくら高祭で深まるＰＴＡ活動」というテーマで、本校のＰＴＡの取組についてご紹介いたします。

本校は、宮城県大崎市の田園地帯に位置しています。大崎市一帯は大崎耕土として世界農業遺産に認定されています。また、近隣には加護坊山があり、毎年２,０００本の桜が咲き誇ります。四季折々の自然に囲まれたこの地域は、生徒にとって心落ち着ける大切な環境となっています。

本校は、８時４５分から１５時１５分までのⅠ部と、１３時１５分から１９時ま時までのⅡ部を併設した単位制・定時制高校です。不登校を経験した生徒や働きながら学ぶ生徒、外国籍の生徒など、多様な背景を持つ生徒が自分のペースで学んでいます。少人数制授業や学び直しを大切にして、「もう一度学びたい」という思いを支える学校です。

さくら高祭は、生徒にとって、自己表現の場であり、地域や保護者につながる貴重な機会です。ＰＴＡはこの行事において、主に飲食ブースの運営を担ってきました。かつては豚汁やチャーシュー丼などを提供し、多くの来場者に親しまれてきました。しかし、新型コロナウイルスの影響により、一時は調理販売が中止となりました。そして、再開後もＰＴＡ会員数の減少という新たな課題に直面いたしました。

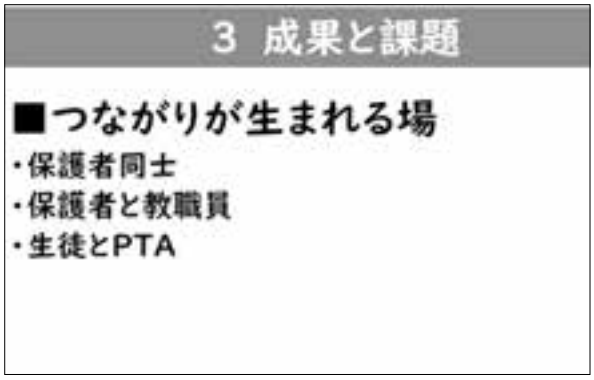
本校ではＰＴＡ役員を全て立候補制としています。会長や会計といった役職も例外ではありません。無理に依頼や推薦を行わず、「できる人が、できる形で関わる」という考え方を大切にしています。この仕組みが結果として、さくら高祭のような行事への前向きな参加につながっています。しかし、社会状況の多様化・複雑化により、保護者自身も様々な事情を抱えているのが現実です。従来型のＰＴＡ活動をそのまま当てはめることは難しくなっています。そこで私たちが大切にしているのが、先ほどご紹介しました「さくら高祭」を中心としたＰＴＡの在り方です。現在は規模を縮小しながらも、豚汁販売を中心に活動を継続しています。それでも毎年、大盛況です。



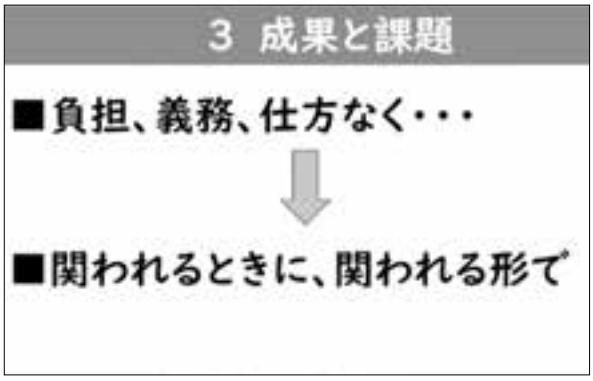


ここで大切にしているのは、「できる形で続ける」ということです。本校では、さくら高祭の活動に限定してサポートしていただける、サポーターという組織があります。今年度は１４名の保護者の方が協力を申し出てくれました。また、食材となる野菜は、保護者や地域の方々からの提供をいただいています。調理や運営も、参加可能な方が無理のない範囲で行います。「短時間の参加

でも構わない」「当日だけの協力でも歓迎する」、そうした柔軟な関わり方を大切にしている学校です。



この活動を通して私たちが実感しているのが、「つながりが生まれる場」との価値です。ふだんなかなか顔を合わせることない保護者同士が、自然に一緒に調理をしたり、出来上がった豚汁を提供したりすることで会話が始まります。学校の様子や子どものこと、日々の悩みや気づき、共有する中で緩やかな信頼関係が育まれます。また、教員と距離も近づきます。形式的な会議ではなく、同じ立場で一つの行事を支えることで、お互いの理解が深まっていきます。そして何より、生徒たちがその姿を見ています。私たち大人が協力し合い、楽しそうに活動している姿は、「自分は支えられている」という安心感につながっています。それが生徒の学校生活に良い影響を与えていると、私は考えています。そして、大人が支え合う姿そのものが、生徒にとっての「安心の教材」になっていると感じています。



どうしてもＰＴＡ活動というと、「負担」や「義務」といったイメージが持たれがちです。しかし、本校では「関われる時に、関われる形で」という柔軟さを大切にしています。文化祭という一つの場に焦点を当てることで、参加のハードルを下げ、多くの保護者が自然に関わることができています。その結果、無理なく、そして楽しく続けられるＰＴＡ活動が実現しています。

最後になりますが、私たちＰＴＡ活動の目標は、とってもシンプルです。「子どもたちが安心して学校生活が送れるよう、大人が緩やかにつながる」こと。さくら高祭は、そのための大切なきっかけとなっています。これからも「無理なく、楽しく」、そして「つながりを大切に」しながら、ＰＴＡ活動を続けていきたいと思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。





ちょっとの参加でずっと見守るPTAへ
～小規模校こその“顔の見える支えあい”の力～



発表者 立　桶　善　孝
岩手県立軽米高等学校ＰＴＡ会長

皆様こんにちは。昨年度まで軽米高校のＰＴＡ会長を務めておりました立桶善孝と申します。本日のこの東北大会での発表が私にとって最後の役目となります。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、軽米高校について簡単に紹介させていただきます。

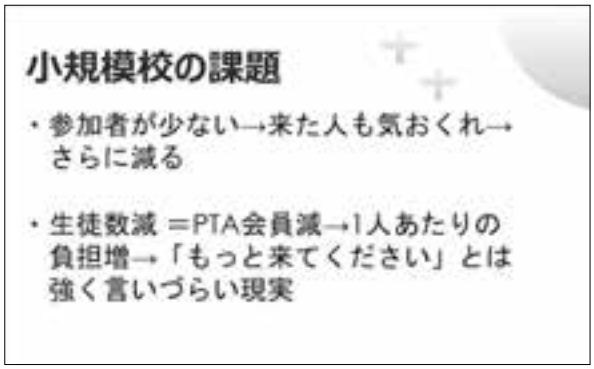
軽米高校は、岩手県の県北部、人口およそ８,０００人の軽米町にある、町で唯一の県立高校です。人口減少に伴い、生徒数も減少し、今年度からは募集定員が１学級４０名となりました。しかし、自治体と連携し、教育活動を行う地域校として地域に根ざした学びが保障されている学校でもあります。軽米町からは、通学費や給食費、制服代、タブレット端末代まで補助をいただいております。生徒にとっては本当に恵まれた教育環境となっています。私自身は隣の青森県八戸市に住んでおり、娘もこの通学補助のおかげで毎日バスタクシーで通学することができました。これほどありがたいことはありませんでしたし、そのおかげで娘は充実した高校生活を送ることができました。また、軽米高校にはちょっとユニークな特徴もあります。週刊少年ジャンプで連載され、アニメ化もされた「ハイキュー！！」、バレーボールにかける高校生たちの熱血青春物語です。その作者の古舘春一さんは軽米町出身で、作中に登場する校舎は軽米高校を連想させるものとなっています。そのため、国内外のファンが連日、軽米町を訪れるほか、軽米高校の文化祭では生徒が案内をして校舎見学ツアーを行い、それを目当てに多くの来場者が訪れます。昨年度は６００名の来場者がありました。

さて、本題のＰＴＡ活動についてお話しします。

詳細はお手元の冊子をご覧ください。

他校の特色あるＰＴＡ活動は本当に参考になりますし、保護者がたくさん参加している学校の活動を見ると、正直うらやましいと感じることもあります。私は１年生の頃から役員として関わり、協力したいという思いで活動してきました。しかし、小規模校ならではの苦労もたくさん経験しました。今日は、あえてその悩みや現実を正直にお話しすることで、うちも同じだと多少なりとも思っていただき、共有できればと思っています。実際私がＰＴＡ会長を引き受けることになったのも、ほかにやる人がいなかったからで、こんなはずじゃなかったというのが本音です。でも今はやって良かったと心から思っています。

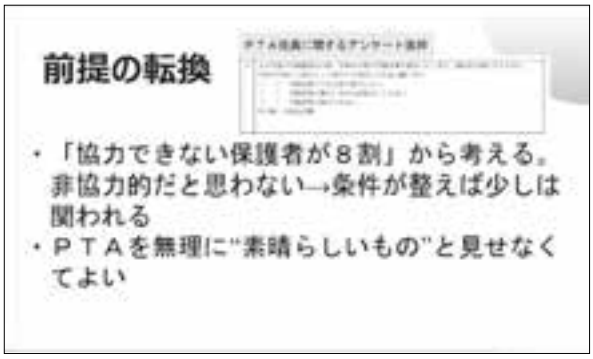
軽米高校のＰＴＡ活動は、他校と比べて特別すごいことをしているわけではありません。しかし活動を続ける中で感じたのは、保護者全体に呼びかけても参加者が少なくて寂しい思いをしただけでなく、せっかく来てくれた保護者も気後れしてしまい、次から参加しづらくなるという悪循環があることです。これはよくないと考えました。また、生徒数が減ればＰＴＡ会員も減る。つまり一人一人の負担は自動的に増えていきます。だからといって、もっと来てくださいと強く言うのも違います。現実と将来を見据えて、どう活動を続けていくかを考えなければならないと感じました。



軽米高校は連携型中高一貫校であり、挨拶運動を中高合同で行っています。そこに保護者も加わります。それは地域全体で子どもを育てているという一体感があります。生徒同士、親同士、顔見知り、アットホームな雰囲気は小規模校ならではの強みです。この強みをもっと生かすべきだと思っています。

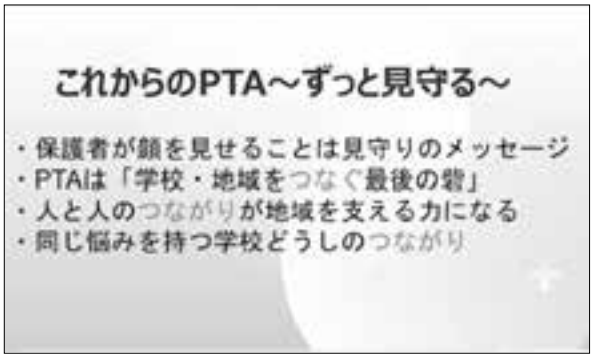


役員ができるかというアンケートの例年の結果から、協力できない、できるならやりたくないという保護者は８割はいるという前提に立つことは必要です。だからＰＴＡ活動をすばらしいから参加しましょうとアピールするつもりはありません。ただ、つながりが希薄になりつつある今、ＰＴＡは学校、保護者、地域がつながる最後の砦かもしれないと感じています。保護者が学校に来ることは、子どもにとって、自分の家族は自分に関心を持ってくれているというメッセージになります。これは子どもにとって本当にうれしいことだと思います。その思いをこれからも子どもたちに届けていきたいと思っています。



今後の提案として、軽米高校のＰＴＡ活動は活動量そのものを少しでいいと明確に示し、ちょっとだけでいいということをもっと伝えていきたい。企画も軽めの選択肢を増やし、その中からできるものを選ぶ方式に変えていく。少しの参加でもいろんな保護者が入れ替わり顔を見せることで、みんなで見守っているというつながりをつくれるはずです。また、母親に負担が偏りがちなので、父親の参加ももっと促していきたいと思っています。

また、研修旅行についても、バス代の高騰で費用がかかる割に参加者が集まらない現状があります。ＰＴＡ会費を適正に使うためにも、もっと多くの保護者に還元できる企画を、前例にとらわれず考えていく必要があります。ただし、役員の負担が増えすぎないよう、無理のない形を模索していくことも大切です。



これらはあくまでも私個人の考えですので、役員全体で話し合ったりしたわけではありません。正直、今回の発表も困惑しました。しかし、この企画は、むしろとても良いチャンスだと今は思っています。今ここに参加されている東北各地区の高校の中には、同じ悩みを抱えておられる学校もあるはずです。そして様々な工夫をされている学校もあるはずです。ＰＴＡ活動紹介だけで終わるものではなく、同じ共有の学校同士のつながり、知恵を共有することこそ、この会議の本来の意味だと考えています。

軽米高校はこれからも続いていきます。私の娘がそうであったように、これからも生徒たちの笑顔がたくさん見られるよう、これからも応援を続けていきたいと思います。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

つながるＰＴＡ研修をめざして
～「人」とつながる「地域」とつながる研修旅行～



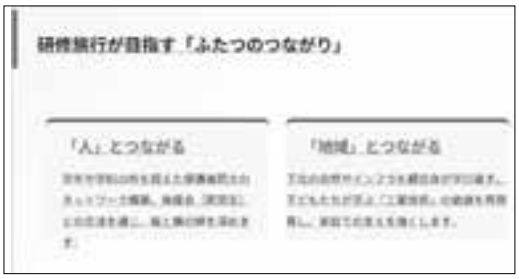
発表者 **山　崎　明　男**
青森県立むつ工業高等学校ＰＴＡ会長

ありがとうございます。皆様お疲れさまです。本日は、青森県立むつ工業高等学校ＰＴＡ研究協議発表として、「つながるＰＴＡ研修をめざして～「人」とつながる「地域」とつながる研修旅行～」というテーマでお話しさせていただきます。

学校紹介につきましては、大会要項２８ページをご参照ください。

２０２５年度の研修旅行は、それまでの体験旅行にとどまらず、学校を支える私たち保護者、同窓生、教職員が互いに絆を深め、そして地元下北の魅力を再発見するための大切な一歩となりました。事業終了が決定している脇野沢村と仏ケ浦を結ぶ観光遊覧船に乗船することができ、タイミング的にとてもメモリアルな研修になりました。メモリアルな研修といえば、私ごとですが、昨年１月にアキレス腱を切りまして、アキレス腱を切った人は分かると思うんですけれども、切ったアキレス腱は２倍の太さでつながります。人とつながる。地域とつながる。山崎のアキレス腱もつながった。そういう自分的にはリハビリも兼ねての研修旅行となりました。その研修について発表させていただきます。

まず、今回の研修旅行で私たちが目指した２つのつながりについてです。



１つ目は、人とつながること。子どもが同じ学校に通っていても、学年や学科が違うと保護者同士がじっくり話す機会は意外と少ないものです。そこで、子育ての悩みや進路について本音で語り合える横のネットワークをつくりたいと考えました。また、本校では、この研修をＰＴＡと後援会の合同で開催しており、後援会の役員を務められている本校同窓生の先輩方とも語り合える貴重な場となっています。

２つ目は、地域とつながること。子どもたちが日々学んでいる工業技術は、この下北の豊かな自然や社会インフラに深く直結しています。親である私たち自身が下北ジオパークとして認定されているこの地域の価値を学び直すことで、子どもの学びを家庭でより深く支える土台をつくることが目的です。



さて、旅行の最初の訪問地は、美しい砂浜が広がる川内マリンビーチです。ここでは地域と人の２つを同時につなぐプログラムとして、ビーチの自然を生かしたクラフト体験活動を行いました。流れ着いたシーグラスや色鮮やかな貝殻、流木などの自然な素材を使って、オリジナルのフレーム制作に挑戦しました。きれいな貝殻が並んでいると思います。それどこで見つけた。その海岸の形、素敵ですね。やっぱりむつ湾ありました、ホタテの貝殻。ホタテの海岸を見ると、やっぱり言いたくなります。武田久美子。といった言葉が自然と飛び交い、ものづくりの楽しさを共有しながら参加者同士の緊張が一気にほぐれていきました。

次に向かったのが下北ジオパークのハイライトでもある仏ケ浦です。ここは数百万年前の海底火山

の噴火によって降り積もった火山灰が隆起し、激しい波や風に削られてできた白亜の奇岩群です。まさに大自然が時間をかけてつくり出したエンジニアリングの極みと言えます。子どもたちは学校の実習で素材の強度や加工技術を学びますが、私たちはここで自然界の圧倒的な破壊と創造のエネルギーを体感しました。この大地のダイナミズムを肌で知ることで、立派な地域探求の学びです。脇野沢発のフェリーからじっくり見える仏ケ浦。上陸して見上げる巨大な奇岩の迫力はすばらしいものでした。

たくさん歩いてお腹がすいたところで、お待ちかねの昼食タイムです。今回は地元の食文化とつながるため、脇野沢特産の焼き干しをぜいたくに使った伝統の焼き干しラーメンを皆で堪能しました。いわしの頭と内臓を１匹ずつ手作業で丁寧に取り除き、炭火でじっくり焼き上げてつくられるスープは、上品で驚くほど深いコクがあります。この手間暇を惜しまない職人のようなこだわりは、まさに工業高校のものづくりスピリッツにも通じるものがあります。おいしい郷土の味を囲み、同じ釜の飯を食べることで、車内だけでは生まれなかった温かい一体感が生まれました。

午後からの視察は、下北の暮らしと密接に関わる川内ダムです。東北屈指の規模を誇るこの重力式コンクリートダムと湖を間近で見学し、社会インフラを支える工業技術の重要性を改めて学びました。私たちの生活を支える水資源がどのように管理されているのか、そして美しい周囲の自然環境とどのように調和しているのか、下北ジオパークガイドの方から歴史背景などを伺い、子どもたちが学校で学ぶ土木や電気、機械といった技術がいかに地域社会の命綱になっているかを実感し、親として誇らしく感じる時間となりました。



こうして様々な体験や視察を重ねる中で、当初の目的であった人とのつながりは大きな実を結びました。ビーチでのクラフト制作やラーメンをおいしく食べた時間、そして仏ケ浦の圧倒的な景色、ダム周辺の穏やかな景色を一緒に見たことで、保護者間の距離は急速に縮まりました。旅の終盤の車内では、進路選択や資格取得、部活動など、様々な挑戦をしている子どもたちを親としてどう支えるかなど話題となりました。一人で抱え込みがちな子育ての悩みを共有し、励まし合える心強い仲間、先輩を見つけることができました。



今回の日帰り行程のまとめです。朝、学校を出発し、車内レクから始まり、マリーンビーチでのクラフト体験、仏ケ浦の絶景視察、焼き干しラーメンでのおいしい交流、そして川内ダムでのインフラ学習、夕方に学校へ戻るまで、まさに人と地域にどっぷり浸かる濃密なスケジュールを全員で無事に完遂することができました。再断絶の危険もありました研修ですけども、山崎のアキレス腱もつながったままでした。

今回の研修旅行がもたらした成果は大きく分けて２つあります。１つは、家庭での会話の深化です。親自身が下北の食や自然、インフラを多角的に学んだことで、子どもが学校で行っている地域探求活動をより高く、より高い解像度へ応援できるようになりました。もう一つは、ＰＴＡの結束力向上です。一人で悩まないＰＴＡ、ここで築かれた強固な横のつながりは、秋のむつ工祭、文化祭をはじめとする今後の学校行事の運営において最高の強力基盤になる確信があります。

最後になりますが、今回の旅行で私たちは、下北の豊かな土壌とそこに暮らす人々の温かさに改めて触れました。むつ工業高校ＰＴＡは、これからもこの地域のように温かく、そして社会を支える技術のように頼もしく、子どもたちの未来の挑戦を全力で支え合ってまいります。ご参加いただいた皆様、そして活動を支えてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。

本当の最後になりますが、青森県の教育に関係している方は分かっていますキャッチコピーがございます。それをご紹介します。青森県の皆さんは分かっていると思います。みんな大好き青森県。

本日はご清聴ありがとうございました。

地域・故郷とともに子どもを育むために
～ＣＳ（コミュニティ・スクール）を起点としたＰＴＡのインクルーシブな展開～



発表者 **金　子　宗　元**
秋田県立ゆり支援学校ＰＴＡ会長

秋田県立ゆり支援学校のＰＴＡにつきまして、「地域・ふるさと共に子どもを育むために～コミュニティスクールを起点としたＰＴＡのインクルーシブな展開～」と題しまして発表させていただきます。

ゆり支援学校は、知的障がいなど様々な特性を持つ児童生徒が一緒に助け合って学んでいる学校です。小学部、中学部、高等部が一体となってＰＴＡ活動を行っておりまして、小中高の全ての世帯が秋田県高Ｐ連に参加をしています。全てのＰＴＡ会員が、文化部、研修広報部、環境整備部の３つに分かれて企画運営をしています。本校のＰＴＡ活動の出席率は、役員会や総会ともなると８０％から９０％以上もの高い出席率に上ります。これは、参加してくださった方々からアンケートを詳細に取って、その意見を踏まえつつＰＴＡの在り方を検討するといった努力と、本校がコミュニティスクール活動を行っているからだと思われます。



文化部の活動です。左側がベルマーク集計活動、右が読み聞かせ活動です。左はレクレーションでのポッチャ、右上はピン倒し、そして右下は制服などのリユース活動です。

研修広報部は、学校報の編集・発送作業を行っています。卒業後の進路先を見学するグループホームや事業所、一般企業などの見学を行っています。

環境整備部は、本荘マリーナや象潟海岸などでのクリーンアップ、そして町内会や地域の公共施設の花壇の植栽・整備活動などです。学校祭や卒業式の前には、校内の清掃や飾りつけなど環境整備を行っています。高等部のビルクリーニング班の生徒たちが窓の清掃の仕方を保護者に説明するところから始まります。



こちらは、各学部のＰＴＡで保護者学習会を行っている際の様子です。

以上のようなゆり支援学校のＰＴＡ活動は、コミュニティスクール活動を核とした地域と双方向の活動交流を行っていることが大きな下支えとなっていると考えられます。本校の学校運営協議会は、多方面にわたる委員で構成をされておりまして、スクリーンをご覧になっていただくと分かりますが、左上の方には保護者としてＰＴＡ会長や学校後援会の方々、それから左下の方には地域から由利本荘のカダーレの館長様や鳥海山木のおもちゃ館の理事長さんや、それから公共職業安定所の所長様、それから町内会の会長様、それから青年会会議所の理事長様、それから右

上の方には由利本荘市とにかほ市の教育委員会の皆様、それから校長先生、それから元本荘北中学校の校長先生、そして右下の方には本荘市、にかほ市の福祉に関わる課長様方、それから地域生活支援センターの所長や、福祉関係の施設長、管理者の方々など、こうした方々が学校運営協議会に参加をしてくださっておりまして、各委員が積極的に発言をし、意見を出し、学校運営に関わってくださっています。学校と地域との連携を深めることで、地域の力を生かし、子どもを地域全体で育てる意識を高めたりすることができます。



学校運営協議会は年に３回開催され、熟議を行っています。こうした場での様々な意見から、教育活動やＰＴＡ活動のさらなる展開が生まれております。ＴＤＫ野球部、またブラウブリッツとの交流の様子です。地域応援活動としてはＰＴＡの海岸のクリーンアップなど、それから地域の伝統芸能、左が天神あやとり、右が菖蒲音頭です。実際にその芸能の保存会の方々から指導を受けている様子になります。天神あやとりというのは、天神集落の方が湯沢市の院内銀山に来ていた四国の巡業一座から習ったのが始まりとされておりまして、これによって子どもたちは、ただこのあやとりや踊りを学ぶだけでなく、１９５４年の閉山まで約３５０年に及ぶ国内有数の銀山が地域にあったというその地域の歴史にも触れ、学びを深めているわけです。それから、菖蒲音頭は、市町村合併の節目に１市１０町の風景を盛り込んだ歌詞が公募されてできたもので、子どもたちはここからふるさとを愛し、盛り上げようという願いを学んでいることになります。

和太鼓をにかほ市の院内小学校からお借りをしたので、そのお礼を兼ね、同校の子どもたちの前で円舞をし、同世代の児童生徒との交流につながった様子であります。

改めて、こうしたコミュニティスクール活動を起点とした活動の展開をまとめてみますと、コミュニティスクールの御縁もあって地域の企業チームとの交流が始まり、その企業より例えばお米の贈呈を受けたことをきっかけに、コミュニティスクールコーディネーターを通じて田植え体験をさせてもらい、そしてそのお米の収穫から調理や食育の授業へと展開しました。また、コミュニティスクールでの提案を受けて象潟海岸でのクリーンアップへの参加が実現し、そこで現地のボランティアスタッフの方から、小さなプラスチックごみなど海洋資源ごみによって海の生き物の命が脅かされるのだということに気づかされました。これを受けて学校では、ＳＤＧｓの学習へと発展をしていきました。また、文化祭の演目に伝統芸能を取り上げ、それぞれの保存会の方々から直接指導を受け、その歴史や伝統についても学び、最終的には、ほかの地域の同世代の児童生徒との交流に発展しました。



以上のように、コミュニティスクール活動を活発化させ、地域住民との交流や意見を取り入れることで、地域と一体となり、地域ぐるみで子どもたちを支え、ＰＴＡ活動、さらには学校運営を活発化させることができると思われます。さらに、このコミュニティスクール活動を核にすることで、私たちの地元、ふるさと、人口減少、高齢化の進む地域社会を活性化することにも貢献することができるのではないかと考えております。

以上をもちまして発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答



コーディネーター
秋田県生涯学習センター
シニアエキスパート（兼）社会教育主事
滝　澤　徳　彦　氏

コーディネーター：
　各県の代表の皆様、それぞれの発表ありがとうございました。
　本日の研究協議のテーマは「地域・家庭・学校つながる応援隊！～子どもたちの健やかな成長を育む“つながる”ＰＴＡ活動とは～」でございます。この視点から各発表をお聞きになり、皆様が感じたり、それからお考えになったりしたことがおありになると思いますので、会場の皆様からご質問をお受けしたいと思います。ご質問だけでなく、ご意見やご感想でも結構でございます。



福島県立若松商業高等学校　佐藤充：
　福島県の若松商業高等学校の佐藤充と申します。教員です。
　ゆり本荘の支援学校さんの方で、ＰＴＡ総会など８０％から９０％の参加があるということで、本校も６０％ぐらいを目標にしてるんですけども、依然として参加は２０％程度にちょっとなっております。企画として吹奏楽部の発表なんかも合わせた、抱き合わせて、あと、学校の授業参観なんかも抱き合わせてやっているんですけども、２０％程度にとどまっているので、何かこう特別なプログラムだったり、呼びかけだったりっていうのがあれば教えていただきたいなと思って質問いたします。

コーディネーター：
　はい、ありがとうございました。確かに８０％から９０％、驚異的なＰＴＡの出席率でございます。金子ＰＴＡ会長様よろしいでしょうか。お願いいたします。

秋田県立ゆり支援学校ＰＴＡ会長　金子宗元：
　ゆり支援学校では、まずお仕事をお休みにならない調整をしております。お休みにならないと、こうしたＰＴＡの行事にも参加していただくことが難しいということから、約一月以上前に早め早めにスケジュール、日程の方をお知らせをするということに努めていることがまず１点。それから、ＰＴＡの複数の行事を同じ日に企画をする。例えば午前中早い時間に総会を行って、その後、ＰＴＡの授業参観などを行うというような形で、複数の事業をなるべく同一日時に、日時っていうのは同じ日に設定をさせていただくことで、保護者の方が仕事を休まなければならないということについての、一月に何回も何回も休まなくても済むように調整をしているということがまた一つあります。それから、先ほど申し上げましたように、各ＰＴＡの行事ごとに参加をしていただいた方から詳細なアンケートを出していただきまして、そのアンケートを基に、例えば日程や時期・時間帯について、こうしてもらいたいという意見だとか、あるいは内容についてこういうものを取り上げてもらいたいというよう

な意見を細かく調べさせていただいて、それを基に役員会等で企画をさせていただいて、次のＰＴＡ行事へとつなげているということがございまして、そうしたことの積み重ねも出席率の高さになっているのかなというふうに個人的には考えているところですが、よろしいでしょうか。

福島県立若松商業高等学校　佐藤充：
ありがとうございました。

コーディネーター：
佐藤様ありがとうございました。
ほかにございませんでしょうか。あ、前の方どうぞ。よろしいですか。

宮城県泉館山高校ＰＴＡ会長　畔野健司：

ではすいません、せっかくなので。宮城県泉館山高校ＰＴＡ会長をさせていただいております畔野健司と申します。よろしくお願いします。
立桶さん発表された軽米高校のＰＴＡのお話を伺いまして、すごくなるほどなと思ったので、そちらの方についてちょっと自分なりの意見と、それからちょっと一つだけご質問と思いまして、マイクを取らせていただきました。
発表の中でですけれども、まあ確かに少人数っていう学校だよというところで、で、その割合的に考えた時にＰＴＡのなり手が少ないっていうふうなことは確かにおっしゃっておりました。まあ正直言いまして、全体として１００人規模であろうと、多分、あるいは数百人、１,０００人規模であろうと、割合的には正直そんなに変わんないんだろうなとは思っています。その中で、そういった意味で考えますと、役員はやりたくない。つまり拒否する。で、やりたくないわけじゃないけど、協力できない。物理的に、まあ仕事があったり、家庭の事情であったりで、できないという人も含めると８割できませんよと。ＰＴＡしない、ああ、ちょっと協力できませんよという方がいらっしゃるというふうなお話でした。逆に言うと２割いるのかと、ちょっと私は思ってしまうんですよね。あ、２割いるっていうことは、９７人の生徒でしたっけ、約１００人近くいらっしゃるとすると、単純に言うと、あ、２０人の保護者はやりたくないわけでもないし、ああできるんだと思っちゃうわけですよね。あ、２０人もいる。いや、下手すると、父さん、母さんがいるとすれば、あ、４０人近くいるんじゃんって僕は逆に思ったりするわけです。そんな中で立桶さんがおっしゃっていたのが、もともと自分も、まあその２０人なり、４０人なりの一人で、まあこんなはずじゃあなかったんだよと、最後おっしゃってました。だけど、やって良かったともおっしゃっていました。私自身もそうなんですけれども、やっぱり、今日のテーマもそうなんですが、応援をすると必ず自分に返ってくるんですよね。多分そういったところの喜びがきっと立桶さんにもあって、やって良かったっていう今の感想になってると思うんです。つまりは、僕らって何でも、ＰＴＡに限らずボランティア活動でも何でもそうなんですが、何か面倒くさそうでやりたくないじゃなくて、実はやってみると、あるいは人を応援してみると、自分も応援されている。自分にも得るものがたくさんあるっていうことを案外知らない人が多いので、そういったことを一つ一つ伝えていくのが僕らの使命かな。で、こうやって今日みたいなのが盛り上がっていくのかなと感じています。そういった考え方は私自身持っているので、まあ負担と考えるか、要は誰かのために役に立つことが喜びと思うかっていうその考え方の違いで、一つ一つがやっぱり変わっていくのかなと思っています。
私の個人の意見なんですけれども、立桶さんの方に質問が一つございまして、中高一貫っていうふうな学校っていうふうに伺いました。で、私自身は実は恥ずかしながら、小学校、中学校っていうのは、どこの旦那、父親、もう９９.９％の父親はＰＴＡのＰの字もないまま、小中、もしくは高まで来てると思うんですよね。ごくごく一部の人たちが小学校、中学校から持ち上がって高校までっていう人

が正直大半だと思います。で、私は恥ずかしながら、小中までは、その９９．９％の中でした。たまたま学年の、３人子どもがいる学年のタイミングで、たまたま高校からＰＴＡをさせていただいているんですけれども、楽しさしか知らないんですよね。こんなにいい活動があんのに何でみんなやらないんだろうって思っちゃってるわけです。だけど、小学校、中学校から経験されている皆さんっていうのは、聞くと皆さん言うんですけれど、やらされてたよねっていう、持ち回りで、じゃんけんで負けて、しぶしぶやってたよね。１回やって、１年やったら何とか逃げられるからみたいな、そんなふうなことをちょっと聞いたりしていました。まあうちのかみさんも実際そうでした。

で、ちょっと伺いたかったのが、やっぱり逆にそういう方々から聞くと、高校って全然違うよね。小中の時のＰＴＡと高校のＰＴＡって全然違うよねって。みんなやったらいいのにね、もったいないっていうふうに聞きます。で、立桶さんに、遅くなりました、聞きますけれども、中高一緒になってＰＴＡ活動をしているっていう中で、ちょっと僕が疑問に思うのが、もしかすると、そのやらされ感まで中高一貫になったりしてないかどうかっていうところだけちょっと伺いたくて、素朴な疑問ですけど、よろしくお願いいたします。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。そのやらされ感について、立桶会長様よろしいでしょうか。

岩手県立軽米高等学校前ＰＴＡ会長　立桶善孝：

中高、私は高校しか携わってないので、ちょっと分からないのですが、恐らくないと思います。そこまで、そういう話はまず聞いたことがないので、ないと思います。私自身も高校に入って初めてＰＴＡと関わることになりました。それまでは一切ＰＴＡ活動すらもそんなに関わってなかった方だと思います。でもやってみて、やっぱり、まあ何ていうの、子どもたちと接する機会がやはり多くなりますので、そういう機会を経て、私ももっと手伝いたいなとか支援したいなと思うようになりました。

こんな感じでよろしいでしょうか。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。畔野様よろしいでしょうか。

宮城県泉館山高校ＰＴＡ会長　畔野健司：

はい、ありがとうございました。まさにおっしゃったのと同じで、実は私も、結局は支援をしたいと言いつつ、結局は自分のためなんですよね。自分に返ってきて、自分がうれしいからやっているっていうふうなところになります。まあそういったところのスパイラルがもっと広がっていくというのかなと感じております。ありがとうございました。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。

ほかにございませんでしょうか。

秋田県立仁賀保高等学校　森久樹：

秋田県立仁賀保高等学校の総務主任　森といいます。美術教師です。私も連続して軽米高校さんの方にちょっと質問っていうか、感想です。

私の学校もちょっと規模が小さくて、８８人、全校で８８人です。共通することが３つあるなと思ってお話を伺ってました。まず規模が一緒ということ。それから、県境の位置にあるっていうこと。秋田県のにかほっていうのは山形県に近いんで、そういう



立地も似てるなと。そして、何と、うちの学校にも有名な漫画家が卒業生でいまして、「ルックバック」とか「チェーンソーマン」とかの藤本タツキさんが、うちの学校の３２期生でございます。共通してるなと思って、ここアピールしておかないといけないと思って、ちょっとマイクをいただきました。

で、私、結構、まあ割と大きい学校に勤めていたんですけども、今、自分の母校、小さい学校に勤めてるんですが、小さい学校ってやっぱり生徒が今どんどんどんどん入ってこないんですけども、逆に利用できるなと思って、一昨日ですか、山形県の遊佐高校と交流させていただきました。で、今度、軽米高校さんと交流させていただきたいなとちょっと思ったので、点と点が線になり、線と線と線が面になるので、よろしくお願いしまーす。ありがとうございました。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。立桶会長様、ご意見でしたけど、よろしいでしょうか。

岩手県立軽米高等学校前ＰＴＡ会長　立桶善孝：

よろしくお願いします。

コーディネーター：

仁賀保高校の森先生どうもありがとうございました。

ほかにございませんでしょうか。会場の皆様よろしいでしょうか。はい、どうぞ。

山形県立酒田光陵高等学校　伊藤茂樹：

山形県の酒田光陵高等学校教員　伊藤と申します。よろしくお願いします。

福島商業様のご発表の中で、自転車通学時のヘルメットの着用率についてのお話あったかと思います。その中で、努力義務という形になっていて、なかなかつけてくれる率が上がらないというようなお話であったかと思います。福島商業さんの努力義務というのは、学校としての決めごとなのでしょうか。山形県は県の条例で、自転車のヘルメット着用、努力義務になっております。で、やはり県の条例であろうとも努力義務であるからには、着用率ってのはなかなか上がっていかないというのが実態です。で、福島県の場合はその辺、条例という形になってるのかどうかということが一つと、もし、壇上の学校様に限らず、この会場の中にいらっしゃる学校様の中で、こういう工夫をしたら着用率上がったよというようなことありましたら情報提供いただければと思います。よろしくお願いいたします。



コーディネーター：

はい、ありがとうございます。そうすれば、この努力義務が学校としてなのか、それとも県の条例なのかということで、まず初めに志賀ＰＴＡ会長様よろしくお願いいたします。

福島県立福島商業高等学校ＰＴＡ会長　志賀学：

こちらに関しましては、県の条例と私は認識しております。学校というわけではございません。で、まあヘルメットつけてもらえれば、やはり何かあった時、身を守るのはヘルメットっていう部分でやっぱり、はい、つけてもらいたいですが、それをつけるのは本人自身っていう部分もあって、そこは自分自身、子どもたちが考えて、何かあった時っていうことをしっかり理解したい、してもらいたいという部分もあるので、あくまで努力義務ということで学校側と、はい、そういう方向でさせていただいてます。で、もちろんリスク面、とてもあるので、そういうところは学校と一緒になって教室のところで説明はさせていただいてますので、それを踏まえて子どもたちがどう対応するかっていうとこ

ろは、やはり個々の、まあ自己成長にもつながる部分でもありますので、そういうところはしっかり一人一人が自分自身の中でちゃんと、ああやっぱり髪型がぐちゃぐちゃになろうとも、つけなきゃいけないなと、いろいろ問題があろうかと思いますけど、はい、そういった部分含めてちょっと子どもたちに、もう成人間近ですから、そこはしっかり大人になる上でも判断、決断していただく上で、このような対応は取らさせていただいております。

コーディネーター：

はい、ありがとうございます。もう一つ、お話がありました、会場の皆様に対して、このヘルメットの着用率の工夫について、うちの学校はこういう工夫してるんだと、学校で、例えばＰＴＡとかでで、もしありましたら挙手をしていただければ大変ありがたいです。

岩手県立盛岡工業高等会校ＰＴＡ会長　及川大造：

岩手県立盛岡工業高等会校ＰＴＡ会長の及川と申します。

ただいまヘルメットの着用率のお話があって、自分の学校でも実は課題になっいて、まあ土地、場所柄っていいますか、盛岡市、盛岡と名前つくんですけれども、南西側に１０キロほど離れたところがという地域性もあって、約半分以上が自転車で通勤・通学してるんですが、やはり義務、岩手県も努力義務ということで、今年度から着用するようにお願いしているというところです。私の子どもは自分で、家から１７キロ離れているので、やはりちょっと時間、夜の部活とか考えて、自動車、まあ自家用車で通学させてました。なので、自転車でっていう時は、帰りがどうしても帰れない時とかは自転車を持ってってとか、途中から下ろして乗せてって、あと乗せるっていうこと、まあ昨年までやってたんですけども、今年度に入ってからヘルメットを買いました。何が言いたいかというと、やはりこれは親の責任かなと思ってます。各親が自分の子どもを守るためにどうしたらいいかと。私の子どももやはり最初は、かぶりたくないって言ってました。それを、まさに昨日なんです、昨日初めて、私がちょっと今日送れないことになったので、自転車を家から持ってくと。で、自らヘルメットを持ったんですね。やはりそれは、まずこれから就職を控えてるとかそういったところも、部活動もちょっと大会も終わって落ち着いたというところもあるんですけども、やはり自覚が出てきたんだなと思います。何か働きかけをするとしたら、まず、私自身も校長先生からお達しが出た。ヘルメットをかぶりなさい。これは自分に言われてると思っています。それをやはり子どもに、かぶれよ、かぶった方が絶対いいから、それはあなたを守るためだよねっていうことを大事にしたいと思って伝えたというところからなので、まずは家庭からっていうのが私は大事なのかなというふうに思いました。まあこれはご意見とさせていただきたいと思います。



以上です。ありがとうございました。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。ヘルメットの着用は、子ども守るっていう視点から、これは親の責任であるということだと思います。

伊藤様よろしいでしょうか。はい、ありがとうございました。

岩手県立千厩高等学校ＰＴＡ会長　秋吉幸江：

岩手県立千厩高等学校ＰＴＡ会長の秋吉といいます。

宮城県田尻さくら高等学校のＰＴＡ会長さんに質問です。ＰＴＡ会員を立候補制としているという大変夢のあるお話で、素敵だなと思って聞いていました。私自身も、まあ小中はあまり大きい役員をしたことはなくって、まず気軽な気持ちでアンケートに丸をしたら、このようにＰＴＡ会長になって

いるというそのような感じなんですけれども、高校のＰＴＡ、負担もほとんどなく、このように勉強になる貴重な機会もたくさんいただけて、そしてＰＴＡの活動自体も結構予算もあって、私も楽しいと感じています。このようにですね、できる人ができる形で関わるという考え方が、このさくら高等学校のＰＴＡの皆さんにどのように浸透していったのか。どのようにして立候補制となっていったのか。その経緯というか、いつからとかいつ頃からとか、そのようなことをお聞きしたいです。



コーディネーター：

はい、ありがとうございます。そうすれば、さくら高校の佐藤ＰＴＡ会長様よろしいでしょうか。お願いいたします。

宮城県田尻さくら高等学校ＰＴＡ会長　佐藤由美：

ありがとうございます。私はちょっと今年度１年生で会長になったんですけども、実は１年だけ置いて、７年間、会長ではなくて役員として７年、子どもを３人、同じ高校に通わせております。ＰＴＡの会員をまず募集する際は、入学式の時に用紙には三択くらいで、参加できる、ＰＴＡの会員が参加できますとか、ちょっと無理ですとかっていうので三択でアンケート用紙をまず保護者の方に渡して、それからお子様を通じて回答いただいて、その中で、どっちとも参加できますっていう会員のお母さんや父兄の方に、ちょっと先生方とか私たちがちょっとこう軽くお声をかけて、できますかって言ってちょっと無理ですってなれば、さくら高祭だけ、先ほどもお話ししたように、さくら高祭でのサポーターが今年１４名、結構多いんですけども、のみで当日だけでも参加っていう形を取っております。主に、さくら高校のＰＴＡの活動っていうのは、さくら高祭のみが活動となってまして、ほかの高校とはまた違って、やっぱり行事がたくさんあったり、いろんな何かその地域との交流の行事があると、どうしても義務や負担っていう部分がかかってしまって、どうしても参加できないって方がもう目に見えるように分かってしまうので、さくら高祭のみでのサポーターができる方はいますかっていう形で書面を作っていただいて、できる方ができる形でやるっていうことにしております。その中でＰＴＡの役員をできる方がもしいれば、私はもうＰＴＡの会長、立候補したんですけども、会計の今、今日サポーターしていれる方も、会長、会計とかも立候補してっていう形で、やりたいことをやるっていう形ですかね。やれる方ができる範囲でやるっていう形で行っております。どうしても不登校を経験した子どもたちが多い学校ですので、正直言って、先ほどたくさんのお父さん、お母さんたちからお話がいただいたように、子どものために何かをやってあげたい、どうしてもこの高校で子どもたちの支援やサポーターをしていきたいっていう方が、うちの学校では何名かいまして、そういう方の貴重なその思いを私たちは受け止めて、活動を一緒に支援している形で行っております。

以上ですけど、大丈夫でしょうか。すいません、ありがとうございます。

コーディネーター：

はい、ありがとうございました。秋吉会長様よろしいでしょうか。よろしいですか。

そろそろ時間が近くなりましたけども、ほかにございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

そうしましたら、まだまだ、ご質問やご意見等いただきたいところでありますけども、そろそろ予定した時刻がまいりましたので、この辺で質疑応答を終わらせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

指導助言



秋田魁新報社 取締役
統合編集本部長
松　川　敦　志　氏

本日発表された東北６県の代表の皆様、本当お疲れさまでした。今しがたまでの質疑も含めて、大変中身のある発表でして、私自身、本当に学ばせていただく機会となりました。皆様の活動は、現代のＰＴＡが直面している様々な難問に対する多様な解の道筋を示してくれたと思います。それぞれの発表について私の方から一言ずつ、非常に差し出がましいようなことでございますけれども、述べさせていただきたいと思います。

まず、トップバッターで発表されました福島商業高校の志賀さん、お疲れさまでした。

非常に伝統校としての歴史や誇りを保ちつつ、保護者や教員の多忙化といった現代のニーズに合わせて、活動を、まず学校が中心に、効率的にスリム化させている中での活動のご様子なんだろうなというふうに伺っておりました。親睦旅行など、かつて様々行っていたような行事を廃止しながら、交通安全学校や学校保健、広報といった生徒の健全育成に直結する実務的な委員会活動に注力している点は、参加されている多忙な現代の保護者の方々にとっても、納得感のある活動の構成になっているんじゃないかというふうに受け止めました。

また、経済的支援については、非常にこの先見性がある活動だなというふうに思いました。県による補助が始まる１年前から、保護者の皆さんの賛同を得て、教室にエアコンを設置し、体育館にも空調を整えたという実績は、昨今のこの温暖化という状況に鑑みまして、ＰＴＡが生徒の教育環境をいかに直接的に、かつスピーディーに改善できるかということを示したすばらしい事例であったと思います。

また、最後に課題として挙げられたヘルメットの着用率ですとか、部活動の全員加入制の再考といったあたりについても、これ非常にそれぞれ難しい問題だと思いますけれども、まず現状を冷静に分析しながら、次の一手を考えようとするような姿勢を感じました。これからどういう方向性を見出していかれるのかということについて、注目をしていきたいと思います。

続いて発表されました山形天童高校の安達さん、お疲れさまでした。

こちらも１００年を超える伝統校が一律の強制としていた地元の天童夏まつりへの参加を希望者制に変更したということは、少子化が進み、学級数も減りゆく中での非常に勇気ある一歩だったと思います。そして、そこで黒子としての寄り添いに徹したＰＴＡの姿というのは、これは安達さんのお言葉にもあったとおり、保護者による応援隊としての一つの理想像ではないかと思いました。沿道からの声援やＯＢとの交流といった活動は、生徒にとって地域に支えられているという自己肯定感につながっていくものだと思います。また、役員の皆さんご自身も無理なく楽しみながら活動して、学校、家庭、地域の三角形の絆を再構築したという活動の歩みは、役員の減少、確保に悩む多くの学校、他校にとって、ＰＴＡ活動の原点を見つめ直す最高のヒントになったのではないかなというふうに感じました。お疲れさまでございました。

続いて宮城田尻さくら高校の佐藤さん、お疲れさまです。

田尻さくら高校が提示をした、できる人ができる形で関わるという理念は、今後のＰＴＡ活動における一つの標準になり得る考え方かなというふうに感じました。先ほど質問でもありましたけれども、役員を立候補制にするという、非常に、本当に理想的な在り方。そして、学校の行事限定での協力者

を募るサポーターという柔軟な組織形態を設けて、さくら高祭に１４名の保護者が自主的に手を挙げてくれたといった実績は、参加のハードルをいかに下げるかということが重要なんだろうなということを体現してくれていたように思います。

特に感銘を受けましたのは、つながりが生まれる場という価値観を通じた、大人が楽しそうに協力する姿こそが、生徒にとっての安心の教材になるという視点でございます。保護者の方々が無理をして疲れてしまうのではなくて、緩やかにつながりながら調理や運営を共に楽しむという、そういった姿を見せるということは、生徒たちに自分たちは支えられているんだという安心感を与えて、ひいては学校生活の安定にも寄与するものだと思います。この大人の背中を見せる教育としてのＰＴＡ活動というのも、他校が非常に参考にできる本質的な活動を捉えたものではないかなというふうに感じました。ありがとうございました。

続いて岩手軽米高校の立桶さん、お疲れさまでした。

人口減少や担い手不足という、ここに集まっている東北の多くの現場が抱えている切実な現実をあえて隠さずに共有してくださった点に、発表の大きな意義があったと思います。ほかにやる人がいなかったから引き受けたという、そしてこんなはずじゃなかったという思いも持ったという本音の吐露は、会場の多くの共感を呼んだことだと思います。ただ一方では、やってみたら、やって良かったという感じを非常に強く持っていると。そこから、活動から導き出されたＰＴＡとしての活動量を少しでいいんだというふうに明確に示すという、一つの解決策といっていいんでしょうか、これは非常に現実的で力強い提案であったなと思います。

ＰＴＡを学校と保護者と地域、この三者がつながる最後の砦であるというふうに定義をして、一歩一歩の小さな歩みを大切にするという姿勢は、小規模校の強みであるアットホームな雰囲気も最大限に生かしたものなんだろうなというふうに感じました。前例にとらわれずにバス研修の在り方を見直したり、父親の参加を促したりといった具体的な模索は、子どもたちに寄り添う応援隊としての誇り、力強さというものを感じるものでした。同じ境遇で同じ悩みを抱える、ここにお集まりの学校、ＰＴＡの方々が、知恵を共有することの重要性を説いた結びのお言葉も、この本大会の意義そのものを象徴するものだったように思いました。お疲れさまでした。

５番目に登場された青森むつ工業高校の山崎さん、非常にユーモアあふれる発表で、会場もグッとこう熱度が増したように思いました。アキレス腱がつながって本当に何よりでございました。

むつ工業高校さんの取組は、従来の親睦を目的とした研修旅行を、２つのつながりを軸にした新たな経験・体験の場へ生まれ変わらせたという点で非常に注目すべきものだったと思います。旅や飲食を共にすることでコミュニケーションや絆が深まるという体験は、これ誰しもが覚えのあることだと思いますけれども、むつ工業高校ＰＴＡさんの活動で保護者間の距離がグッと縮まったよというご報告は、この一つの目標としている人のつながり、これがまず狙いどおりいったんだということを示していました。子育ての悩みを共有し、子どもたちを親としてどう支えるかというとても難しい問題を、率直に語り合える絆、仲間ができたという経験は、大変参考になるものだったと思います。また、地域とつながるという２つ目の狙いも、これはまさに目標をしっかり達成するものであったようです。



地元のことを意外に知らないという経験も、これ多くの人が身に覚えのあることだと思いますけれども、親自身が地域の価値や技術の重要性を非常に高い解像度で学んだことで、家庭における子どもとの会話が深まり、ＰＴＡの結束力向上にもつながったと。生徒の挑戦をより具体的に応援できる土台がつくられたという活動は、ＰＴＡ活動の新しい成果の形と言えるんじゃないかなというふうに感じました。

そして最後に発表された地元秋田、ゆり支援学校の金子さん。

ゆり支援学校の取組は、コミュニティスクールという仕組みを最大限に活用した、地域と共にある学校という理想形だったんじゃないかなと思います。学校運営協議会に、保護者の代表だけでなく地域の非常に様々な立場の人たちを交えて、さらに当時者の思いを反映させる熟議を行っているという点は、民主的な学校運営、ＰＴＡ運営の鏡と言うべきものなんだろうなというふうに思いました。全ての会員がいずれかの専門部に所属して、高い出席率を維持している背景には、様々な工夫の中で活動が形骸化しないように求心力を保っているということがあるんだろうなというふうに感じました。地域の伝統行事、天神あやとりの継承ですとか、地元の企業との交流など、地域全体で子どもを支え、育てるんだというこのインクルーシブな展開というのは、特別支援学校という枠を越えて、全ての学校が目指すべき共生社会の姿であろうと思います。学校が地域を支えて、地域が学校を必要とするという双方向の関係性を、そこにＰＴＡがハブとなって築き上げているという点に、地域の課題の解決にも直結するＰＴＡの今後の在り方として非常に前向き、積極的で高度な取組というものを感じました。お疲れさまでございました。

各校の発表を通じて、東北のＰＴＡ活動をよりよくするためのキーワードのようなものとして私が感じたのは、うまく縮んでいくということです。言うまでもなく人口減少が進み、学校の数も減り、学級の数も減り、子どもたちも減りという中で、様々な事業を維持していくというのは非常に困難を伴うと思います。そこでは縮小ということが欠かせないわけですけれども、そこではただ縮小するのではなくてですね、ＰＴＡ活動の本質を見極めながら、うまく縮んでいくということが重要なんだろうなと思います。やはり先ほど様々な質問の中でもありましたけれども、やはりどうしても負担感とか義務感といったものをハードルに感じて踏み出せない保護者の方、私自身もそうなんですけれども、たくさんいると思います。そこに、いかに、そのハードルを越えていただくかというところに様々な工夫の発表がありまして、非常に参考になるものだったろうなと思いました。関われる時に関われる形でやるんだとか、無理なく楽しく、こういった活動の在り方を通じて、家族が、大人が子どもたち、自分たちに関心を持っているんだよ、見守ってくれているんだよというところを見せていくことで、この大会のテーマでもある、つながるＰＴＡの活動とは何なのか、つながる応援隊としてのＰＴＡの新たな形とはどういうものなのか、そういうところの将来像が垣間見えた発表であったと思います。本日お集まりの皆様に、これだという一つだけの正解を示したというよりは、それぞれに発表の中からエッセンスを持ち帰って、自分たちの活動に引きつけて、何か前向きな前進につなげられるような収穫があった、そういった発表だったんではないかなと感じました。

今日の発表を通じて、東北各地で新たな一歩がちょっとずつ、少しずつ踏み出されることを期待申し上げまして、私からの指導助言とさせていただきます。お疲れさまでございました。



閉会行事
次期開催県あいさつ



青森県高等学校PTA連合会
会長 濱　田　大　臣

皆さんこんにちは。青森県高等学校ＰＴＡ連合会です。

令和９年度の東北大会ですが、先ほどご紹介いただいたとおり、青森県での開催となります。ただいま皆さんにお聞きいただいてるのは、ご存じ、青森ねぶたのお囃子です。一足早く青森で夏を感じてもらいたく、青森市の皆さんにご協力いただきました。

青森県は本州最北端に位置する県であり、日本海、太平洋、むつ湾の三方を海に囲まれ、さらに秋田県にまたがる世界遺産白神山地を有する、豊かな自然に恵まれた県です。その豊かな自然が育んだリンゴ、にんにく、長いも、マグロ、ホタテなど、全国に誇るおいしい食べ物が数多くあります。オッケー、ねぶた、もうちょっと待とう。そして青森といえば、夏です。青森ねぶた祭、弘前ねぷたまつり、八戸三社大祭、五所川原立佞武多、田名部まつりなど、県内各地で個性豊かなまつりが開催されます。まつりの名前を挙げれば切りがないほど、青森県の夏は熱気と活気にあふれ、多くの県外の皆様にも、また来たいと感じていただいております。

そんな熱い青森の夏が始まる少し前の令和９年7月1日・2日の2日間、東北地区高等学校ＰＴＡ連合会青森大会を開催いたします。ご参加いただく皆様には、来て良かった、また青森に来たいと思っていただけるよう、青森らしさを感じていただける様々な企画やおもてなしを準備しております。東北の仲間と共に学び、語り合い、交流を深め、思い出に残る2日間にしたいと考えております。是非、各県から一人でも多くの方がご参加いただけますよう、県、ＰＴＡ連合会、そして各単位ＰＴＡでのお声かけをよろしくお願いいたします。

昨日、そして今日と秋田県で感じた東北のパワーと団結力を、次は青森県でさらに大きなものにし、東北の絆をより一層深めてまいりましょう。東北は一つ。来年、青森の地でたくさんの皆様とお会いできることを心より楽しみにしております。

最後に、もう少しだけ、青森ねぶた囃子をご披露いたします。

来年、青森でお待ちしてまーす。



第75回東北地区高等学校PTA連合会
秋田大会　参加者数

（1）　大会参加者数（7月１０日・あきた芸術劇場ミルハス）

区分	県名　等	参加者数	受賞者(内数)	実行委員	備　　考
一般参加	青　　森	100	2		
	岩　　手	189	2		当日参加1
	宮　　城	147	7		
	山　　形	67	1		
	福　　島	52	3		
	秋　　田	408	6	193	実行委員のみ18
	小　　計	963	21	※18	
その他	来賓等	5			全国事務局長含む
	講　　師	2			
	総合司会	1			
	研究協議	2			コーディネーター1　指導助言1
	次年度開催県	7			ねぶた囃子7
	舞台業者等	16			旅行2・舞台11・写真3
	高校生発表	70			
	男鹿海洋	12			生徒10＋引率2
	合　　唱	53			調律1・伴奏1・生徒44＋引率7
	高総文祭	5			生徒3＋引率2
	その他	3			全国大学生協連3
	小　　計	106			
合　　計		1,069	21	※18	

※実行委員のみ１８

（2）　情報交換会参加者数（7月9日・ＡＮＡクラウンプラザホテル秋田）

区分	県名　等	参加者数	実行委員	備　　考
一般参加	青　　森	78		
	岩　　手	66		
	宮　　城	43		
	山　　形	44		
	福　　島	40		
	秋　　田	110	15	実行委員のみ5
	小　　計	381	※5	
その他	来賓等	3	※1	司会者含む
	アトラクション	5	※5	超神ネイガー
	その他	5		全国大学生協連3・写真2
	小　　計	13	※6	
合　　計		394	※11	

※情報交換会のみ１１

（3）　総　　計　　1,０９８名

編集後記

秋田県高P連会長（湯沢高等学校ＰＴＡ会長）

菊　地　佐起子



秋田大会報告書を最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。７月の暑い中、ご臨席賜りましたご来賓の皆さま、そして東北各県よりご参集いただきました多くの会員の皆さまに、心より感謝申し上げます。

さて、大会開催の頃は美しく咲き誇っていた蓮の花も今は咲き終え、たくさんの実を結ぶ季節へ移り変わりました。皆さまと共に過ごしたあの充実した時間が大輪の花を咲かせ、これからの子どもたちの健やかな成長と未来を育む大切な「実」につながっていくと確信しております。ここで得られた経験や絆を大切に、今後のＰＴＡ活動に活かしていただけたらと思っております。

最後になりますが、本大会の開催にあたりご尽力いただきました実行委員の皆さま、中央地区担当校の皆さま、そして東北地区高等学校ＰＴＡ連合会のすべての関係者の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます、ありがとうございました。

事務局の西村さん、真紀さん、そして陰ながら協力してくださいました伸子さん！本当に感謝の気持ちでいっぱいです！

ありがとうございました。

秋田北高等学校ＰＴＡ会長

松　本　　繁

去る７月９日、１０日に開催されました「第７５回東北地区高等学校ＰＴＡ連合会秋田大会」が多くの皆様のご協力のもと無事に終了し、ここに報告書をお届けできますことを心より嬉しく思います。

また、東北各地より多くのＰＴＡ関係者が集うこの大規模な大会において、実行委員のひとりとして大会運営に携わり貴重な経験をさせていただいたことに感謝したいと思います。

今回、秋田北高校は記録部会を担当したのですが、部会メンバーの献身的な働きと素晴らしいチームワークで無事に重責を果たすことが出来ました。大会中のスナップ写真を撮るため、会場内外を奔走しご尽力いただいた部会メンバーの皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。



最後になりますが、本大会の開催にあたり、また、本報告書を製作するにあたり、ご指導・ご協力をいただきましたすべての関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、東北地区の高校ＰＴＡ活動のさらなる飛躍を祈念申し上げ、結びの言葉といたします。

秋田県高校生商品開発コンテストにおいて高校生が考案したメニューによる昼食弁当

献　立　表

ひじき煮（えだ豆入り）	蕗と筍のきんぴら	あんかけポテトサラダ とんぶりのせ
黒い食品は現代人に不足しがちなミネラルや食物繊維が豊富に含まれており、免疫力を高めアンチエイジングにも効果があることから、日常的に摂取することが推奨されています。 秋田県では、古くから海産物の販売が盛んに行われてきたことから、黒の食品の代表**「ひじき」**と、豊かな風味と濃厚な旨みが特徴の秋田の**「えだ豆」**と合わせ、色合いによい煮物に仕上げました。	秋田県は全国有数の山菜の宝庫です。中の一つ、秋田を代表するの**「竹」**である根曲がり竹は、これを好物とするクマと奪い合いになるほどおいしいとか…。 今回は、竹と並んで秋田を代表する山菜**「蕗」**を合わせ、和食献立、そして弁当の定番、きんぴらに仕上げました。	マッシュポテトに、とろとろの「あん」をかけました。 上にのった**「とんぶり」**は、独自の加工技術で食用にしたホオキグサの実で、見た目が魚の卵に似ており、プリプリした歯触りから、"畑のキャビア"とも呼ばれています。 フワ、トロ～、プチッの新感覚のサラダです。
鶏もも肉の米粉揚げ マスタードソース付き	**鮭の麹焼き／卵焼き**	**バター餅／オレンジ**
食物繊維、ビタミン、ミネラルなどが豊富なことから、健康志向の高い人にも人気の米粉。 ほどよく脂肪がのった**「鶏もも肉」**に風味、栄養価の高い**「米麹」**をまぶしてつくった米粉揚げです。 米粉ならではのサクサクとした食感が魅力の一品です。	米どころ秋田で発展した"麹文化"。米を無駄なく使い切る精神から、麹を用いた様々な料理や漬物が生まれました。 栄養価の高い**「鮭」**と、整腸作用や疲労回復効果などが期待される**「麹」**の組み合わせは、腸活や免疫力アップに効果的！！	寒くても固まらないため、冬期間、狩猟に出るマタギたちの携行食として、昭和の中頃に生まれた**「バター餅」**。 広くは北海道まで行商をしていたマタギ地域では、バターが簡単に入手できたことから、地域の女性たちによって工夫してつくられていたそうです。 秋田が誇る、素朴な味わいが魅力の伝統菓子です。
白米／いぶりがっこ	**比内地鶏スープの茶飯**	**梅ご飯**
旨み、甘み、粘り、歯ごたえなどのバランスがよく、完成されたお米と言われる郷土秋田の米「あきたこまち」。 あきたこまちを用いた３種のご飯をどうぞお楽しみください。		
付け合わせに、秋田の郷土食の代表、**「いぶりがっこ」**を添えました。 甘塩っぱくて、スモーキーな風味、パリパリとした食感は、ご飯との相性、抜群です。	薩摩地鶏、名古屋コーチンと並ぶ日本三大美味鶏として全国に知られる**「比内地鶏」**。古くから県北地区で飼育され、秋田の伝統食"きりたんぽ鍋"には欠かせない材料です。 今回は、この比内地鶏のがらスープを使った茶飯を炊き上げました。	お弁当の**「梅」**は、刻んでご飯に混ぜると、菌の繁殖が抑えられ、抗菌効果が高まると言われています。 ご飯三種の締めは、梅でさっぱりと。

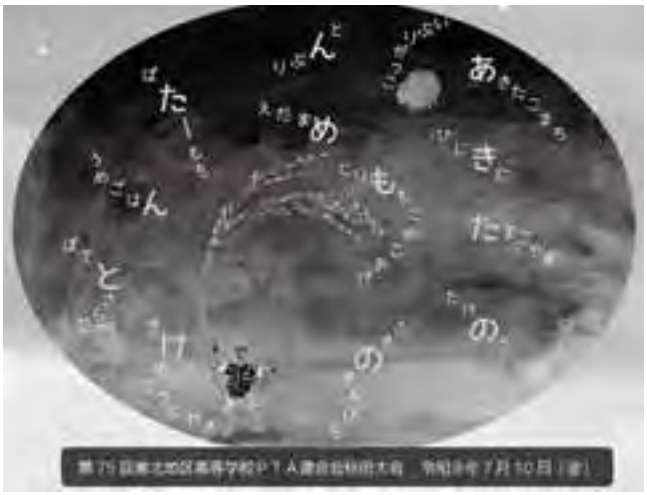
○ このお弁当は、秋田県高校生商品開発コンテスト（～令和１年）において高校生が考案したメニューをもとに、弁当向けにレシピをアレンジして提供させていただいています。

○ 掛紙の原画は、**秋田県立秋田中央高等学校　３年　佐々木　龍聖**　さんに作成していただきました。

弁当写真



弁当掛紙



秋田大会「報告書」原画および「秋田モチーフ」について

【秋田大会「報告書」原画制作】

秋田公立美術大学附属高等学院
２年（制作当時）　　五十嵐 ひなた



【制作意図】

秋田の豊かさや明るさを表現するため青、赤、黄といったパっと目に入る色を使って制作しました。色が鮮やかなため、形は柔らかい印象を持たせて調和させるよう円形を多く使いました。

【「秋田モチーフ」原画制作】

秋田公立美術大学附属高等学院　２年（制作当時）
浅野 ひばる、五十嵐 ひなた、今野 来美、宇佐美 快、
小林 茂輝、佐藤 萌々夏、原田 琉花

「秋田モチーフ」の原画は、この「開催要項」のデザインに加えて、先に刊行した「ご案内」および「開催要項」のデザインにも共通して用いられています。原画制作に当たられた秋田公立美術大学附属高等学院の皆さんのご協力に深く感謝いたします。

第75回　東北地区高等学校PTA連合会秋田大会報告書

編　　集：　**第75回 東北地区高等学校PTA連合会**
秋田大会事務局
〒010-0955　秋田県秋田市山王中島町1の1
秋田県生涯学習センター 5F
TEL:018-863-6681 FAX:018-863-8360
E-mail:akhspren@jasmine.ocn.ne.jp

印　　刷：　**秋田中央印刷株式会社**
〒010-1612　秋田県秋田市新屋豊町6番43号
TEL:018-823-7577 FAX:018-862-4459
E-mail:akicyuin@cna.ne.jp



高Ｐ連
AKITA

秋田県高Ｐ連マーク

